吉田彌平編

文國範師

第一部用

一卷

42605
教科書文庫
4
810
51-1826
20000
44861

資料室
教科書文庫
4
810
51-1926
2000044861
375.9
Y019

吉田彌平 編

師範國文

第一部用

卷一

東京
光風館藏版

河野

広島大学図書
2000044861

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 44861 圖書

例言

本書は今回改定せられた師範學校教授要目に據り、新に師範學校第一部用の國語科講讀用教科書として編纂したものです。

本書は現代文を經とし、各時代の代表的文學を緯として編みあげました。そして最後に國文學史の大要を示す仕組にしました。

表記法は國定小學讀本を標準にしました。

地圖・繪畫・寫眞などで本文の理會又は鑑賞に必要なものは、成るべく挿入しました。肖像や筆蹟なども古今の賢哲名流を偲ぶよすがになるものは、つとめて取入れました。

各課の題目の下には作家の氏名又は雅號を記し、文の終りには出所を示して置きました。編纂の都合で、原文の姿のかはつて來たもの

は唯據る所を記すことにしました。

原文に對しては十分の敬意を表して居りながら、なほ多少の手を加へて體裁を整へねばならぬことのありましたのは、甚だ不本意でありますが、本書の性質上まことに已むを得ませんので、偏に諸家の寛恕を請ふ次第であります。

國語・國字・國文に關する知識が特に師範學校生徒に必要であるに拘らず、講讀の教材としては適當なものではないやうに思はれます。それに就いては別に組織を立てゝ一書を編成することにしました。

大正十四年十月

師範國文 第一部用 卷一

目次

一 明治神宮……一
二 水戸のみゆき〔昭憲皇太后御集〕……一〇
三 平安京……藤岡作太郎 一九
四 峠の茶屋……夏目漱石 二五
五 形……菊池寛 三〇
六 詩二篇
春駒……高村光太郎 三六
鳩……三木羅風 三七

七 敵艦見ゆ……水野廣德 三九
八 豐臣太閤……三上參次 四八
九 曾呂利新左衞門……湯淺常山 五七
一〇 曾我兄弟……森林太郎 六二
一一 幼き日……加藤武雄 七〇
一二 童謠五首
一つお星さん……野口雨情 八〇
蜻蛉の眼玉……北原白秋 八三
兄弟……島木赤彥 八四
寺から下りて……葛原齒 八六
ほそみち……西條八十 八七
一三 小兒は詩人……八波則吉 八九
一四 鳥居勝商……湯淺常山 九五

一五 優游涵泳……室鳩巢 九九
一六 凌宵花……吉村冬彥 一〇三
一七 九十九里濱……德富健次郎 一〇七
一八 キラウエア火山に登る……上原敬二 一一五
一九 椰子の實……島崎藤村 一二四
二〇 ポチ……二葉亭四迷 一三六
二一 二葉亭の文章……內田魯庵 一三九
二二 おもひで……新井白石 一四四
二三 同じ人間……渡邊崋山 一五三
二四 茶話……薄田泣菫 一六〇
二五 オリンピヤ……黑板勝美 一六三
二六 佛法僧……高濱虛子 一七〇

二七　故郷……正岡子規　一八四

廣島大學圖書之印

師範國文　第一部用　卷一

代々木の森
東京市の西郊代々幡町大字代々木にある森林
私
本文の作者溝口白羊

一　明治神宮

快美なる色彩の反射と和かい感觸とをもつた太陽の光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら、幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

或時は、無數の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈もある

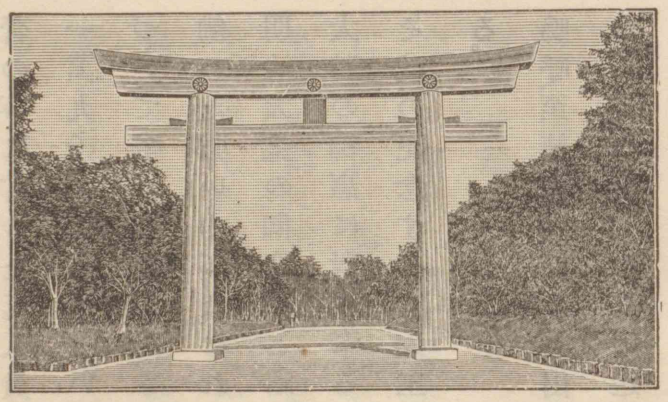
大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、えい〳〵聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだと、さう思ふと、私の心は莊嚴な或刺戟を感ずると同時に、生みの親の墓に對する樣な强い懷かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つて行くのが、たまらない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮がたうとう竣工を告げた。

かつて赤土の露出して居る上に、鋭く尖つた切石が幾つもならんで、烈しい日に光つて居るのを見た處には、今淸々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常綠の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開して居るのが見渡

された御料地は、いつの間にやら、すつかり見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隱れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。



明治神宮大鳥居

神域。眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土、私ははじめて完成した明治神宮の神苑に立つたとき、今更のやうに、其の改つた光景を見て强烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたので

あらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺〆一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して隱れた處に働いた強い力がなければならぬ。

明治天皇の御聖德と昭憲皇太后の御懿德と、そして此の二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の感謝の至情と、此の三つのものこそ此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力である。

嗚呼、至純な動機から出た青年團の造營奉仕、百里二百里の遠方から眞心をこめて輸送した無數の獻木。それらは何事を語つて居るか。實に此の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を

組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠が籠つてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇・昭憲皇太后の御靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

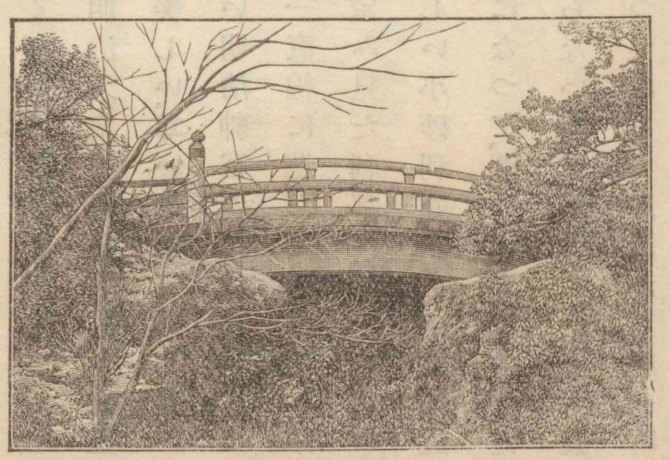
今迄の神社に曾て見たことの無い明治神宮の特色は實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一に此の事を直感した。そして一歩々々、美しい小砂利の上を、神殿に近く踏入るに隨つて、愈肅然たる心持になつて、深く襟を搔合せた。

參道の兩側には盡きることを知らない密林がどこまでも長く續いて、往くに隨つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水

コウラン
勾欄をれまかたらうんかんの造
ヒョウ
凭 よるもたる

の落ちる音が聞えて來る。花崗石の勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を成した風致の好い細流の兩岸、自然石の配置された處に數十株の楓がその影をせゝらぎの水の面に落してゐる。此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總べてが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に千七百四十の樹

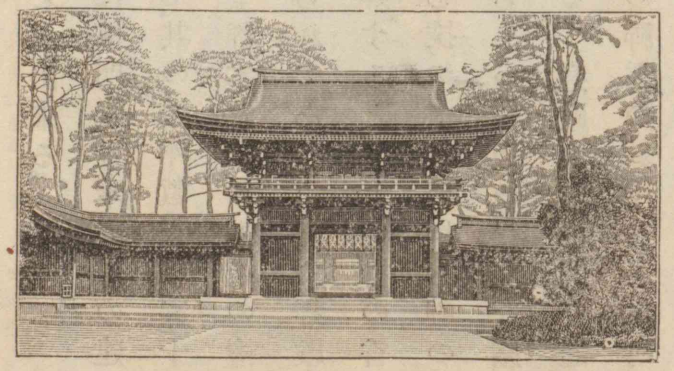


明治神宮神橋

原宿
東京府豐多摩郡
千駄ケ谷町原宿
千駄ケ谷
東京府豐多摩郡
千駄ケ谷町千駄ケ谷

齡を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣產檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居として實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事だ。

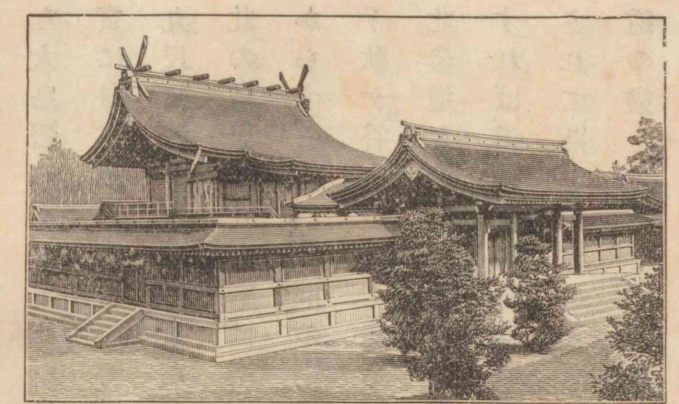
此の鳥居の在る處は南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄ケ谷から來て居る幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で、右を見ると、ぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭々として高く聳



明治神宮樓門

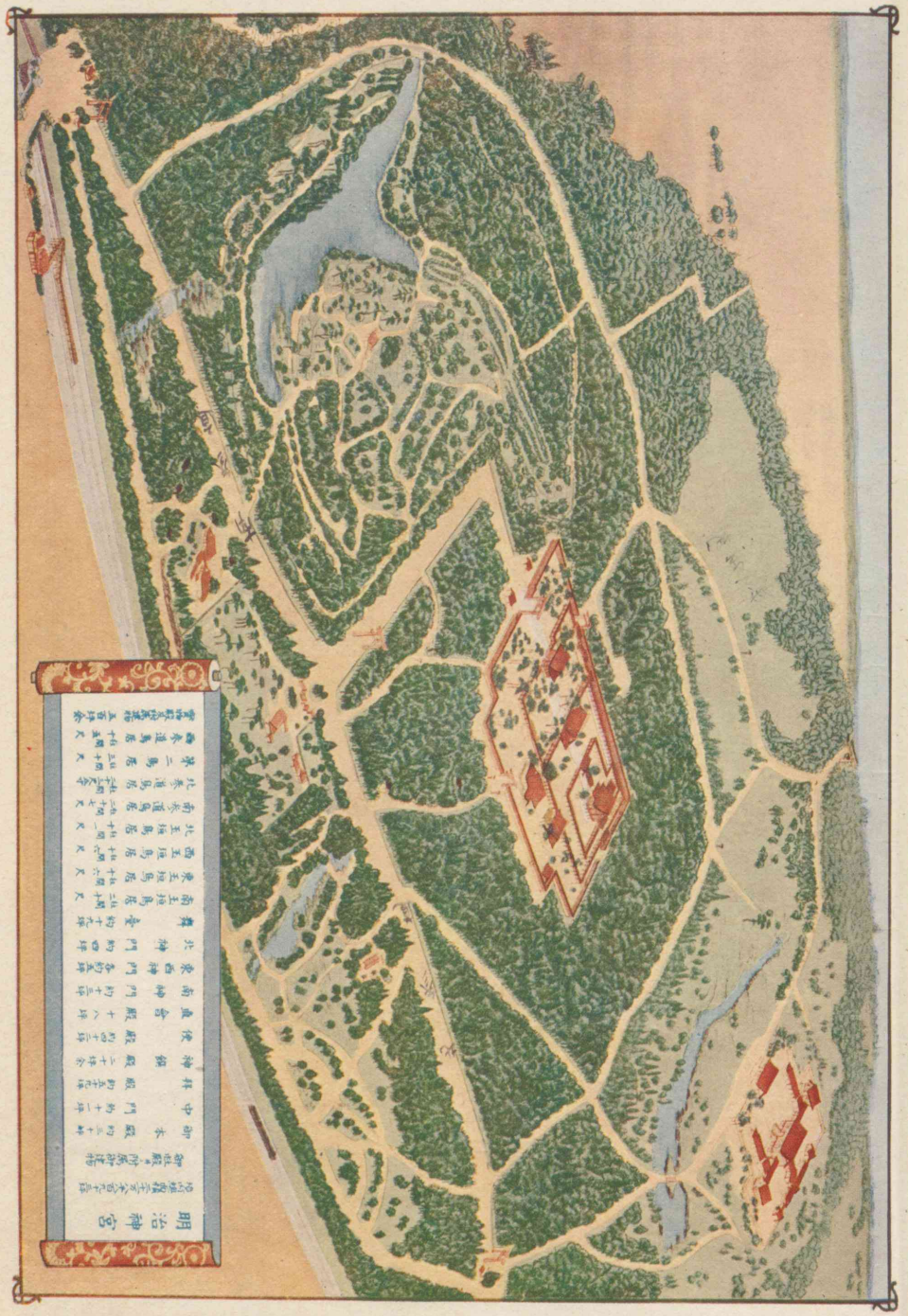
土佐繪
中古の藤原基光同隆能を祖とする一派の歴史畫

えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。



明治神宮本殿

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合せて、其の總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿にのぼつて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は卽ち神靈のおはします內々院で、衆庶の漫に窺ふことを許されない神聖の場所である。



何事の

西行法師が伊勢神宮に參拜したときに詠んだ歌といふ

何事のおはしますかは知らねども、
かたじけなさに涙こぼるゝ。

私は默禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な、併し陰鬱な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隱す所の無い心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを展開して見せてゐる。而もそれでゐて、決して淺露な心持はせずに却て一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな强い威力が迫り寄るのを覺えるのだ。

これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮居といふことが出來

ハンバン
蟠 わだかまる。

カツ
闊 ひろし

ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して國民と近く觸接し、國民と親しく協力して新文明を吸收しようと御勉め遊ばされた明治天皇の活動的進取的の濶達な御氣象に對して、如何にもその明るいお宮の感じが、ぴつたりと呼吸を合せてゐるやうに思はれる。（明治神宮記に據る）

昭憲皇太后
明治天皇の皇后
藤原美子

二　水戸のみゆき（昭憲皇太后御作）

明治二十三年十月二十六日といふ日、茨城の縣へ行幸（みゆき）せさせ給ふ。こは近衛兵の演習を親しく御覽ぜさせ給はんとてなりけり。みづからも從ひ奉るべく、豫て仰言ありしかば、いと嬉しくて出立つ。この大御代ならずばいかで女の身にてかゝることを見んと思ふに、おのづから心も勇みたちて打笑まれぬ。御車、上野の停車場に駐る。やがて樓の上にぞのぼらせたまふ。東宮にも御送りにとくより參り給へり。大后宮よりも典侍幸子御使に參りて厚き仰言ども奏す。みづからも畏き御言葉承る。かくて大臣（おとど）を始め送り奉る人々多かるを、漏し給はず御前近く召して御言葉あり。程なく侍從長參りて何事も整ひたりと奏す。やがて劍璽（三種神器のね）を先だてゝ汽車に召させたまふ。みづからも聯れる車に乘る。笛の音聞ゆるまもなく烟をあとにして御車は疾く進みぬ。道のほど大方は田畑にて、さのみかはれることもなし。されど何處も稻のみのり良きを見るは民のため嬉しきことぞかし。埼玉（さいたま）の縣はさいつごろ（先頃）の洪水に利根川の水溢れきとて、民のいたづきておほしたてし畑つものなども皆荒れ

駐 とゞまる。

樓 たかどの

典侍 ないしのすけ
宮中に仕ふる女官

東宮
今の天皇陛下
大后宮
英照皇太后
幸子
萬里小路幸子
侍從長
德大寺實則

さいつころ（先頃）
サキツコロノ音便

はてたり。河の如き處もありて、行幸をろがむ人々も、あるは水に入り、あるは舟を浮べなどす。いかにして一日々々を送りつらんと思ふに、胸痛うなりもてゆく。そこを過ぎぬれば、稻葉の浪田のもに充ち溢れたるけしきに、心もかはりぬ。處々の樣珍しなど言ひつゞくる間に、早う水戸に着かせ給ふ。停車場より御馬車にて行在所に入らせ給ふ。こは舊城内にある師範學校をそれと定め給へるなりとぞ。とばかりありて例の御對面の事あり。果てさせ給ひし後も聊か疲れさせ給ふ御氣色なくて、明日の演習の方略書などとうでさせて御覽ず。かく御心に懸けさせ給ふを見奉るも畏し。この夜も常の如く十一時に大殿籠りぬ。

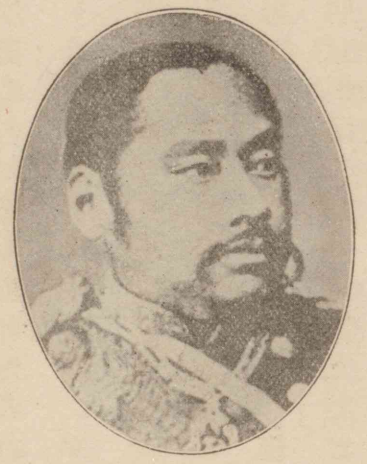
とうで（取あげ）

二十七日、今日も天氣好し。八時より出立たせ給ふ。汽車にて

宍戸
茨城縣西茨城郡宍戸町
水戸市の西十一哩に宍戸驛がある

有栖川宮
熾仁親王
北白川宮
能久親王
岩間村
茨城縣西茨城郡岩間村
宍戸町の南一里
今は常磐線（當時は未開通）の一驛

宍戸といふ處までわたらせたまひ、それより金華山と名づけたる御馬に召させ給ふ。有栖川宮・北白川宮を始め大臣その外數多の人々近衛の將校なども馬にて從ひ奉りぬ。みづからは馬車にて往く。岩間村に到らせ給ふころ、遠近に烟立登り、銃の音こゝかしこに聞えて、赤白の旗風に打靡き、馬の嘶く聲も處々に聞えたり。戰酣ならんと思ふ頃は、銃の音も絶間なきに、

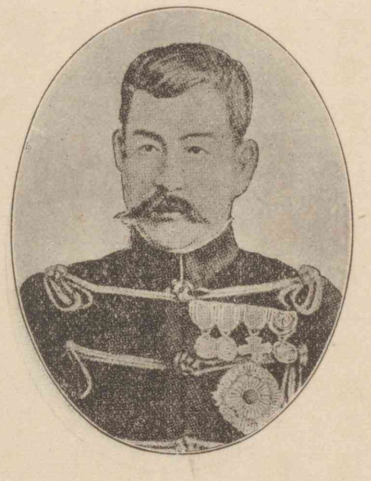


有栖川宮熾仁親王

御心勇ませ給ひて、折々はこと方かたに御馬進めさせつゝ、ねもごろに御覽じ給ふをりしも、秋の末つ方なれど、日影は猶暑く覺ゆるに、更に厭はせ給ふ御氣色もなきを、この演習に出でたる兵ど

もは更なり、文武の官人なべて畏み奉るなるべし。程なく終りぬと奏するより、御野立にて、しばし憩はせ給ひ、さて汽車に召して行在所へ還らせ給ふ。

成井村
同縣新治郡園部村大字成井
山間の南東
筑波山の東の方
三里



北白川宮能久親王

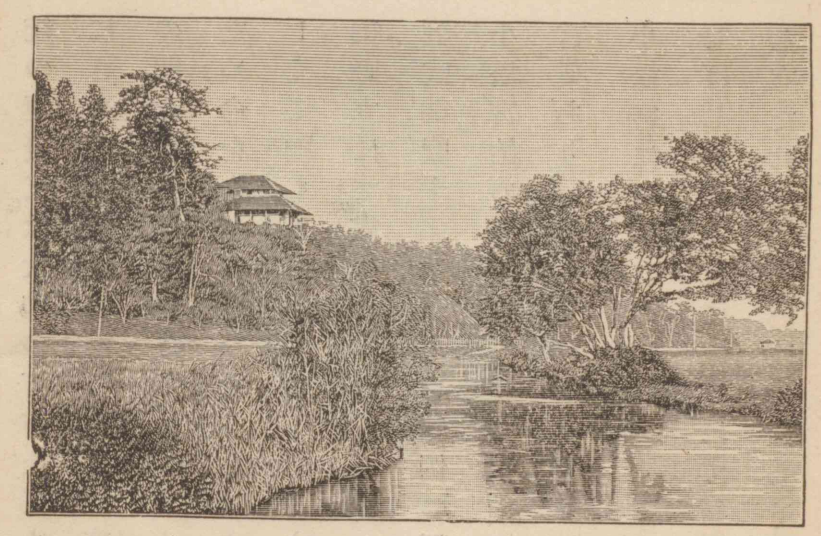
二十八日も昨日の時刻より出で給ひて、こたびは成井村にて御覽あり。筑波山近く見えて景色いとよし。大方は昨日の如し。されど今日は敵の近づきたりと見えて、大砲小銃の音烈しく廣き原にも響き渡りぬ。上には例の御馬にて、道も定めさせ給はず、森の中松の林などに分け入りて見めぐらせ給ふに、木の枝の御鐙に懸るもいと畏し。みづからも車より出でて小

小松宮
彰仁親王
御風のこゝち
二十九日還幸三十日教育勅語を東京の高等師範學校に於て御下賜相成る筈の處たほ御風氣のため常御殿にて文部大臣を召して下賜せられたのであつた

銃の連發又は大砲の打方なども見ずやと附添へる士官のいふにさらばとておりたつ。黒煙立登る中に、火氣見えて烈しき音の聞えたる、いと勇ましし。事あらん日は親妻子をも顧みず、君のため命を捨てゝ戰ひなんと思ふに、いと頼しくはあれど、又痛はしくて胸もふたがるこゝちぞする。今日の演習も果てぬれば、御野立にて畫のおもの聞召す。それより御馬上にて觀兵式・分列式御覽ず。みづからは例の馬車にて見る。終りて審判あり。小松宮始め將校打集ひて御前に進む。兩日の勞を犒ひ給ふ御言葉あり。かたじけなみ奉りて敬禮するさま見るもめでたし。小松宮には兩日の演習のよしあしを高らかにことわり給ひぬ。しばし御休ありて汽車にて行在所に歸らせ給ふ。御道より思し立たせて縣廳へ臨幸ならせ給ふ。今日はあやにくに御風の

常磐公園
水戸市の西郊常磐村にある徳川齊昭の開いたところ偕樂園といつた

好文亭
徳川齊昭が偕樂園の西隅に建てた亭



常磐公園

こゝちにて例ならず見えさせ給ふを、もて隱してかく勉めさせ給ふ、いと畏し。

みづからは仰言によりて、常磐公園なる好文亭といふ處に往く。到り着けば徳川昭武その外人々出迎へたり。

梅數多植ゑたる林あり。こは事ある時の爲に實を貯へんとてなりとぞ。樣々の木立ありて庭の作りざまいと面白し。老松の蔭に石の碁

徳川昭武
徳川齊昭の子後子爵を賜はる

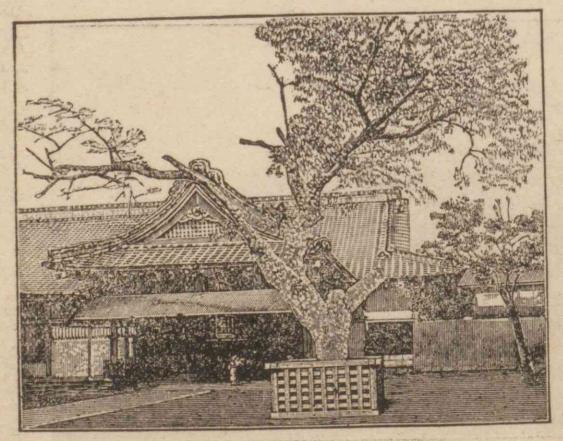
齊昭
水戸藩主萬延元年(一八六〇)薨、年六十一烈公と諡す

弘道館
天保十二年齊昭が建てた藩學

ヴカヒ

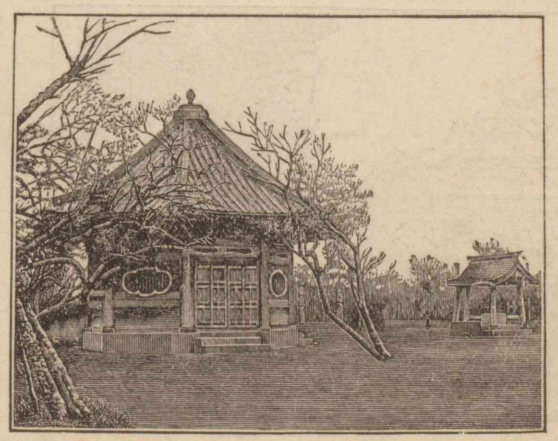
盤將棊盤据ゑ置たる、珍かにて暫し立寄りて見る。高き處なれば、家の内より仙波湖見渡さる。十五夜の月のさしのぼる景色いとよし。色づく小田も見おろされたり。こは中納言齊昭の世を遁れて後、心易く住まひして民のなりはひを見んために造りしといふ。さもあるべく思はる。

家の内廣らかにて、杉戸には詩の韻字殘らず書かせて、詩人を招く時のためとし、又五十音・てにをは書かせて歌人のためとしたる、心しらひの厚さをおもふに、いとゆかし。又板敷あり。こゝは心



弘道館

ある人々に折々酒など與へし處なりとぞ。立歸る道の程弘道館の碑を見る。八角の堂の内に寒水石の大きやかなる、立てり。世に知られたる記を自筆のまゝ彫り入れたるなりけり。一句一句讀みもてゆくに、その人の御國を思ふ志慕はれて涙ぐまれぬ。扉にはこまやかなるほり物あり。鴨居とおぼしき處には易の八卦を彫りつけたり。昔は此處に學舎數多ありきといふ。げに珍しき處を見しかな。是も上の仰言なくばといと嬉しくて、時の過ぐるも覺えず。人々「夜更け侍りぬべし」といふに驚かされて、急



八卦堂

ぎ還る。月夜なれど、篝火焚き提灯など數多照して晝の如し。御前に參る。上には六時ばかりに歸りまし〳〵きと聞きて、後れ侍りぬなど奏するに、打笑はせ給ふ。好文亭の事などつばらかにと思へど、とみに言ひつくすべうもあらねば、かたはしのみ奏す。記さまほしき事ども多かれど、筆も進まず。ことに明日東京へ還りまさんとて御調度ども取納むるに物騒がしければ、書きさして止みぬ。（昭憲皇太后御集）

三　平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり、山川の風景往くところとして佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め群を拔いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキス

藤岡作太郎
號は東圃
國文學者
文學博士
東京帝國大學文科大學助教授
石川縣金澤市生
明治四十三年歿
年四十一

如意が嶽
比叡山の南にある大文字山ともいふ

三の峰
山城國紀伊郡深草村稻荷山の頂上

にしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、曄麗幽婉の形態は備らざるなし。東に近く比叡・如意が嶽より三箇峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬・貴船・氷室・鷹が峰・高尾の山々波濤の如く、西にやゝ隔りて愛宕・小倉・龜山・嵐山・松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃きなかに、或は目覺むるやうなる櫻の入り交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込み、たるあり。一面の草の頂たる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日・夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、西の雙が岡は、大和の畝傍・香山・耳無の三山の如く近く相並びてあらねば、妻爭ひの口碑も傳はらねど、子の日の遊に小松引く樂みなど、いづれ劣らぬところがら。南にやや隔りて男山これに對すれど、國家鎭護の八幡宮、宮柱太知りま

山崎
天王山

四明が嶽
比叡山の頂

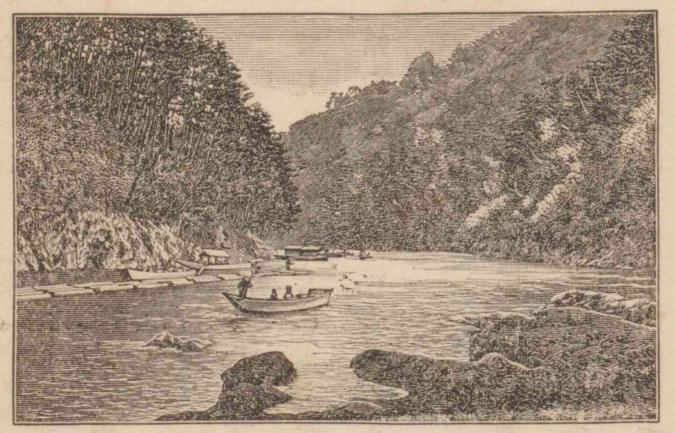
神樂が岡
京都帝國大學の東の岡

吉田山ともいふ

双が岡
京都の西一里花園村にある

男山
山崎の對岸石清水八幡宮の鎭座する山

して仰ぐも畏し。



嵐山

京の東端に沿うて鴨河の流、紀の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少し離れて桂川、大堰の激湍に清瀧を併せて琴の音凉しく又南に向ふ。二河南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。

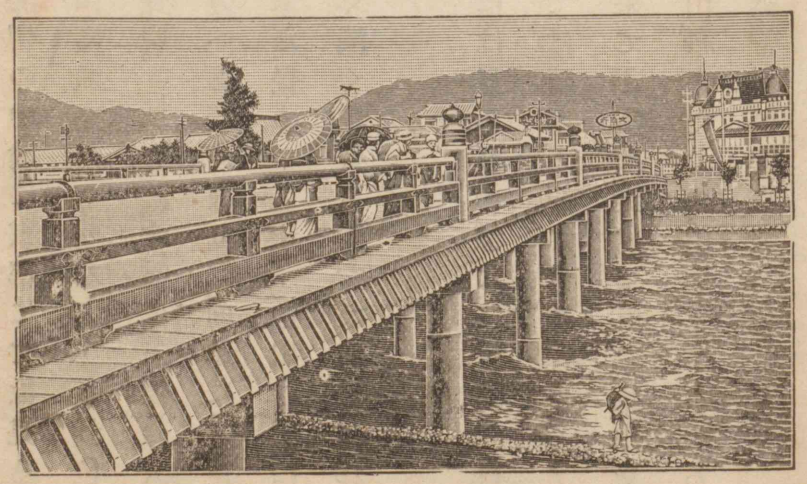
茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるものなしといへども、一面よりいへば

らず。地勢の勾配稍〻急なれば、蘆間に出で入る白帆の、町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、晒す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などの居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜むべしといへども、海なくして、清き京都は益〻その清さを加ふるなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所なるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕ながいかに變化に富めるかは、説明を須ひず

とも明かなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黑雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり重なりて海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か。世界はたゞ一暗黑の中に沒し去るかと疑はれて凄じかりき。かくの如



京都三條より東山を望む

く壯絶なる景は、わが數年の滯留の中遂に京都にては見ることを得ず。されど下京より吉田に通ひたる朝な〳〵の景色は、今に恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ〳〵彼方へ彼方へと淡くなりて、向ふに寢たる東山は有るか無きかの夢より未だ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隱れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。

時雨の景色のまたよその國には見られぬ樣よ。愛宕の峰を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、ばら〳〵と面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直に東山を包みいつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

「山は高くかさんで襟の如し川は長く流れて帶の如し」要害なる事の形容

山科宇治郡山科村

夏目漱石
名は金之助
英文學者
小說家
東京生
大正五年歿
年五十

四　峠の茶屋

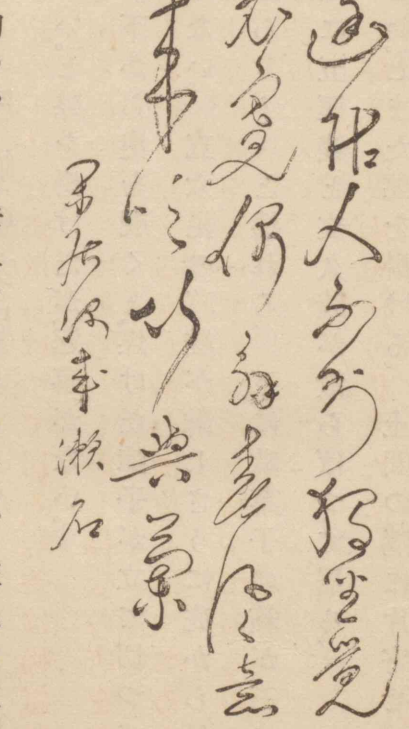
夏目漱石

「おい。」と聲を掛けたが、返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて屈託氣にぶらり〳〵と搖れる。下に駄菓子の箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい。」とまた聲を掛ける。土間の隅に片寄せてある臼の上にふくれて居た鷄が驚いて眼をさます。「くゝゝ、くゝゝ。」と騷ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黑な茶釜がかけてある。幸ひ下は焚きつけてある。

幽居人不レ到、獨坐覺二衣寬一。偶解春風意、來吟竹與レ蘭。閑居偶成　漱石



返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。雞は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で「こけつこつこ」と云ふと、雌が細い聲で「けゝつこつこ」と云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には一升枡ほどな煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうと思つて居た。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は暢氣に燻つて居る、どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の店をあけ放しても苦にならないと見える處が、都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で嘸御困りでござんしよ。おゝおゝ、大分御濡

れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し焚附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつ〳〵と二聲で雞を追下げる。「こゝここ。」と駈出した雌雄は焦茶色の疊から駄菓子箱の中を蹈みつけて往來に飛出す。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳抜盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黑く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に燒きつけられて居る。

「御菓子を。」と今度は雞の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顏を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は、先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈のうちがぱち〳〵と鳴つて、赤い火がさつと風を起して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。嘸御寒かろ。」と云ふ。軒端を見ると、青い煙が突

當つて崩れながらに微かな痕をまた板庇にからんで居る。

（漱石全集）

五　形

菊池寛

菊池寛
小説家、戯曲家
明治二十二年香川縣高松市生

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衛は、五畿内・中國に聞えた大豪の士であつた。

其の頃畿内を分領して、居た筒井・松永・荒木・和田・別所など大名・小名の手の者で、「鎗中村」を知らぬ者は恐らく一人も無かつただらう。それほど新兵衛は扱き出す三間柄の大身の鎗の鋒先で、魁殿の功名を重ねて居た。その上彼の武者姿は戰場に於て、水際立つた華やかさを示して居た。火のやうな猩々緋の陣羽織を着て、唐冠纓金の兜を被つた彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりのけざやかさを持つて居た。

「あゝ猩々緋よ、唐冠よ」と、敵の雜兵は、新兵衛の鎗先を避けた。味方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに、敵勢を支へてゐる猩々緋の姿は、どれほど味方にとつて頼もしいものであつたか分らなかつた。又嵐のやうに敵陣に殺到する時は、その先登に輝いてゐる唐冠の兜は、敵にとつてどれほどの脅威であるか分らなかつた。

かうして「鎗中村」の猩々緋と唐冠の兜は戰場の華であり、味方にとつては信頼の的であつた。

「新兵衛どの、折入つてお願がある」

と元服してからまだ間のないらしい美男の士は新兵衛の前に手を突いた。

駭をどろかす

何事ぢや、そなたとわれらの間に、さやうな辭儀は入らぬぞ。望といふを早う云うて見い」。

と育むやうな慈顏を以て新兵衛は相手を見た。

その若い士は、新兵衛の主君松山新介の子であつた。そして、幼少の頃から、新兵衛が守役として我が子のやうに慈み育てゝ來たのであつた。

「外の事でもをりない。明日はわれら初陣ぢやほどに、何ぞ華華しい手柄をして見たい。就いては、御身の猩々緋と唐冠の兜を借してたもらぬか。あの陣羽織と兜とを着て、敵の眼を駭して見たうござる」。

「はゝゝゝ念もない事ぢや」。

新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は相手の子供らしい無邪氣

鎬をけづる

筒井順慶
織田豐臣時代の武人
天正十二年（三四四）歿年三十六

な功名心を快く受入れる事が出來た。

「が、申して置く。あの陣羽織や兜は、申さば中村新兵衛の形ぢやわ。そなたがあの品々を身に着ける上からは、われらほどの肝魂を持たいでは叶はぬことぞ」。

と云ひながら、新兵衛はまた高らかに笑つた。

そのあくる日、攝津平野の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の兵と鎬を削つた。戰が始る前、何時ものやうに猩々緋の武者が唐冠の兜を朝日に輝しながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乘をしたかと思ふと、駒の頭を立直して、一氣に敵陣に乘入れた。

吹分けられるやうに、敵陣の一角が亂れた所を、猩々緋の武者は鎗を付けたかと思ふと、早くも三四人の端武者を突き伏せて、又悠々と味方の陣へ引きかへした。

その日に限つて、黑皮縅の鎧を着て、南蠻鐵の兜を被つて居た中村新兵衛は、會心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者振を眺めて居た。そして自分の形だけすらこれほどの力を持つて居るといふことに、可なり大きい誇を感じて居た。

彼は二番鎗は自分が合さうと思つたので、乘出すと、一文字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には、戰はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかつた。その上に、彼等は猩々緋の「鎗中村」に突き擾された恨を、此の黑皮縅の武者の上に復讎せんとして猛り立つて居た。

新兵衛は何時もとは勝手が違つて居ることに氣が付いた。何時もは虎に向つて居る羊のやうな怖氣が敵に在つた。彼等が

狼狽へ血迷ふ所を突き伏せるのに、何の造作もなかつた。今日は彼等は對等の戰をする時のやうに勇み立つて居た。どの雜兵もどの雜兵も十二分の力を新兵衛に對して發揮した。二三人突き伏せることさへ容易ではなかつた。敵の鎗の鋒先がともすれば身をかすつた。新兵衛は必死の力を振つた、何時もの二倍の力をさへ振つた、が彼はともすれば突き負けさうになつた。手輕に兜や猩々緋を貸したことを後悔するやうな感じが頭の中を掠めた時であつた、敵の突き出した鎗が裏をかいて彼の脾腹を貫いて居た。（極樂）

高村光太郎
詩人
彫刻家
明治十六年東京生

六　詩二篇

三里塚
千葉縣印幡郡川里塚にある御料牧場
成田の東二里

春駒

高村光太郎

三里塚の春は大きいよ。
見果てのつかない御料牧場にうつすり
もう淺綠の絨毯を敷きつめてしまひ、
雨なら煙るし、露なら光るし、
明方かけて一面に立てこめる杉の匂に、
しつとり掃除の出來た天地二つの風景の中へ、
春が置くのは生きてゐる本物の春駒だ。
すつかり裸の野の獸の清淨さは、野性さは、愛くるしさは、
あゝ、鬣に毛臭い生きものゝ香を靡かせて、
たゞ一心に草を喰ふ。
霞む地平にきら〳〵するのは、

三木羅風
名は操
詩人
明治二十二年兵庫縣龍野町生
宮崎
福岡縣粕屋郡箱崎町千代松原にある宮崎宮八幡宮

尾を振りみだして又駈ける
あの栗毛の三歳だらう。
のびやかな素直なうつくしい、
高らかにも荒つぽい
三里塚の春は大きいよ。（日本詩集）

鳩

三木羅風

ゆるやかに飛びかふ鳩よ。
宮崎の
社の門に幾百羽。
くゝ、くゝ、くゝと鳴く聲の、
樓の棟木の上に充つ。

雄鳩雌鳩も幾百羽。
右に左に上下に、
翼をならし、首をふり、
せはしくあゆみ、日は暮るゝ。
御前の海は果てしなく、
多々羅の濱に寄る波の、
くだけては寄り、はひのぼり、
松の根越に光る見ゆ。
戰のあとも夢となる、

多々羅の濱　箱崎の海濱

國の鎭　筥崎の社には醍醐天皇の宸筆敵國降伏の額などがある

水野廣德　海軍大佐　愛媛縣生

霞國第二艦隊　明治三十八年三月十六日マダガスカルを發し五月五日第三艦隊と安南に會合した司令長官ロジエストウエンスキー中將

鎭海灣　朝鮮慶尙南道にある要港　釜山の西十五里　馬山の南二里

七　敵艦見ゆ

水野廣德

國の鎭と鎭りいます、
筥崎の社の門に幾百羽。
くゝ、くゝ、くゝと鳴く鳩よ。（青き樹かげ）

顧みれば、露國第二艦隊マダガスカルを發せりとの飛報に接し、春尙寒き三月の中旬、故國の山を霞に殘しつゝ、我が聯合艦隊の鎭海灣に集りてより、はや二月あまりの浪枕、浮世の春を他所に見て、焰硝の臭、銃砲の響、骨の碎くる訓練に、心膽愈〻練れて腕益〻冴え、士氣は昂つて敵を呑む一萬八千の海上男兒、敵艦來れと待構へて居る。明くれば五月二十七日、前日の訓練に疲れ切つたる

東郷海軍大將
東郷平八郎
今元帥
伯爵
弘化四年（一二五〇）鹿兒島生

軍艦十八隻
第一戰隊
三笠敷島富士
朝日春日日進
龍田
第二戰隊
出雲吾妻淺間
八雲常磐磐手
千早
第四戰隊
浪速高千穗對
馬明石

將卒の、曉の夢尙濃かなる午前五時、思ひ出すさへ肉躍る、各艦の無線電信機に感ぜし一信、

敵第二艦隊見ゆ。

聯合艦隊司令長官東郷海軍大將は、直に全艦隊に對し、急速出港の命を傳ふると同時に、大本營に宛て、

敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直に出動、之を擊滅せんとす。本日天氣晴朗なれども波高し。

との電報を發した。何ぞ其の語の詩的にして、其の意氣の豪壯なる。かくて我が主力艦隊の各艦艇は、逐次錨を拔いて豫定の航行序列を作り、午前七時には艦隊、全部根據地を出發した。東郷聯合艦隊司令長官は、其の將旗を高く三笠の大檣頭に飜し、軍艦十八隻、驅逐艦水電艇合して二十八隻、陣の延長五海里、雄姿堂

堂たるものであつた。

我が艦隊は行く〳〵戰鬪準備を整へつゝ、洪波を蹴つて、沖の島に向ひ急進した。砲臺には彈藥を備へ、艦橋其の他の要所には釣床（ハンモック）を縛つて防彈障を造り、重要品は水線下若しくは裝甲部に納め、甲板各所には防火・防水の要具を備へ、隔壁戸を締め、通信裝置を驗し、其の他一切の戰備を盡して、最後に甲板を淸めて滑りを防ぐ砂を撒いた。午前十時三十分東郷長官は各艦に向つて晝食の命を下した。士官室は既に戰時治療所と變じ、食卓もなければ椅子もなく、一同甲板に蹲つて、心ばかりの晝食を認めた。晩食の時再び此處に集る者が、果して幾人であらう。是ぞ最後の會食と思へば、張詰めた心にも、坐に感慨に堪へぬものがある。敵情に關する電信は愈〻頻繁となり、彼我艦隊は刻々相接近しつ

第三戰隊
笠置千歳新高音羽
第五戰隊
嚴島鎭遠松島橋立八重山
第六戰隊
須磨和泉千代田秋津洲

つある。我が主力艦隊は正午、沖の島の北方約十五海里の地點に達した。而も未だ敵影を認めない。東郷長官は止つて敵の來るを待たんよりは、寧ろ進んで之を迎ふるに如かずとなし、針路を右に折つて更に西方に向つた。山の如き逆浪は艦首に激して甲板を洗ひ、飛沫は颯として水面上三十尺の艦橋に達する。已にして午後一時三十分頃に至るや、朝來敵と接觸を保ちつゝ來りし我が第三戰隊を南西方に、第五・第六戰隊を西方に發見し、茲に始めて我が全艦隊の連絡を遂げた。尋いで同四十分頃我が主力艦隊は左舷南方數海里に當り、濛氣を破つて堂々進み來る敵の全艦隊を發見した。大小合して三十餘隻の艨艟は、大戰闘旗を檣頭に飜し、遙に其の後尾を濛氣の裡に隱しつゝ、北々東の針路を取つて眞一文字に航進して來る。雲を拔け出づる黑

龍か、波を蹴破る長鯨か。壯大雄偉、實に目も覺むるばかりである。參謀長以下幕僚を率ゐ、三笠の前艦橋に立つて、敵艦隊を睥睨せる東郷大將は、各艦に戰闘用意を命ずると共に、先づ敵勢力の薄弱なる左翼部隊を擊破せんと決心し戰闘速力を以て、斜に敵針路の前方を横斷した。偶〻旗艦三笠の檣頭、颯と飜りし一連の信號旗、

皇國の興廢此の一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ。

全艦隊一萬八千の將卒は覺えず奮躍した。

敵の艦隊既に指顧の中にあり。艦内如何にと見渡せば、艦長は艦橋に在つて戰備一切を督し、航海長は羅針盤を擁して艦の操縱に任じ、砲術長は距離を測つて砲火の指揮を統べ、水雷長は方位盤を整へて發射の機を窺ひ、分隊長は受持砲臺を指揮し、各從屬將校は夫々分擔の配置を守り、萬に一失なきを期して居る。砲員は砲に、水電部員は發射管に就き、運彈員は彈藥を運び、防火隊は蛇管を繰り、信號部員は揚旗索を握り、戰鬪の開始を今や遲しと待つて居る。中下甲板に降りて見れば、防水戸は密閉せられ、鐵窓扉は鎖され、何れの區劃も人影寂として電燈獨り輝き、唯要所要所に配置せられたる傳令兵の耳を澄して佇めるのみ。副長と甲板掛士官とは、艦の前後に奔走して、火災・浸水の非常を警めて居る。前後二箇所の戰時治療所には、石炭酸の臭紛とし

て鼻を衝き、看護は繃帶を整へ、軍醫は刀を執り、一脚の手術臺は早く愛國の血潮を舐めんと待つて居る。更に降りて彈藥通路に到れば、こゝは水線下十數尺なる溫度百二十度の焦熱地獄、流るゝ汗を拭ふに暇なく、力に餘る大小彈藥を各砲臺に供給する。轉じて機關室を窺き見れば、油の焦げる異臭先づ鼻を衝き、此方の機關室には、幾百貫の大曲肱が轟々聲を發し、全速力を以て回轉せる有樣、實に耳聾し眼も眩むばかりに物凄く、彼方の汽罐室には猛火炎々として絶えず投げ込む石炭は一瞬にして白熱の團塊と化す。朦朧たる中に、水を注ぐもの、油を差すもの、石炭をくぶるもの、此處には戰鬪既に開始せられて居る。

午後二時二分我が艦隊は、敵を左舷南方約一萬米に見るに及んで、針路を南西に變じ、敵と反航の姿勢を執つた。我が速力十五

正奇　赭顔　屹然　噴々

伊地知海軍大佐
伊須知彦次郎
後に海軍中將
加藤海軍少將
加藤友三郎
後海軍大將
内閣總理大臣
大正十五年薨
年六十二
秋山海軍中佐
秋山眞之
後海軍中將
大正七年卒す
年五十一
布目海軍中佐
布目滿造
今海軍少將
安保海軍少佐
安保清種
今海軍中將

烟眼ー烟
良く物ごとを見透す

海里、敵の速力約十海里、彼我艦隊は今や一分間約八百米の割合を以て相近づきつゝある。此の儘直進して敵と反航戰を交へんか、將た針路を反轉して敵の先頭を壓せんか、正奇の戰法未だ孰れに決するかを知らぬ。こゝ三笠の艦橋上を眺むれば、赭顔長身、剃るに閑なき腭鬚に飛沫の露を拭ひもやらず、屹然羅針盤を擁して立てるものは、開戰以來旗艦長として令名噴々たる艦長伊地知海軍大佐である。（口々に云いはやす、有名な）雙眼鏡片手に敵の行動を注視せるものは、冷靜沈毅、頭髪焦ぐるも猶熱せざる參謀長加藤海軍少將である。烟眼隆鼻「ノート」を手にして悠々敵狀を寫せるものは、神謀鬼策機に應じて斷ずる先任參謀秋山海軍中佐である。其の他航海長布目海軍中佐は海圖を按じて彼我の位置を測り、砲術長安保海軍少佐は秒時計を握つて彈道の時間を計らんと構へ、各少尉候補生は或は測程儀を窺ひて距離を測り、或は傳話管に就いて命令を各部に傳へて居る。而して豐頰短軀、左手堅く長劍の欄を握り、右手輕く雙眼鏡を携へ、半白の粗髯を海風になぶらせつゝ、泰然として敵を眺むるものは、是ぞ我が聯合艦隊司令長官東郷海軍大將である。戰機は愈〻熟して距離測程

つか　欄ー欄

敵艦見ゆ

戰鬪開始前の三笠艦（東條鉦太郎畫）

士の報ずる聲は、九千米、八千五百米。既に十二吋砲の有効距離に達した。砲は彈丸を孕んで射手の指は引金に懸つて居る。萬弩齊しく發せんとして未だ發せず、滿を持して動かざること山の如し。正に是山雨來らんと欲して風樓に滿つの時である。（此一戰）

山雨來らん　溪雲初起日沈レ閣、山雨欲レ來風滿レ樓。（唐の許渾の詩の句）

三上參次　史學者。東京帝國大學文科大學教授　文學博士　慶應元年（一八六五）播磨國生。

眞書太閤記　三百六十餘作者未詳

繪本太閤記　八十四餘作者未詳

八　豐臣太閤

三上參次

從來、豐太閤の人物・事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記・繪本太閤記等の書にして、三國志・漢楚軍談などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書には、武邊の偉人としての太閤は稍描き出されたれども、其の他の側面は、殆ど全く忘却せられたるが如く、間〻又いみじき誤謬をさへ流布したり。太閤が無學文盲なる人と傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。

三國志　通俗三國志の略　七十五卷　陳の陳壽の三國志を和譯したもの

漢楚軍談　十五卷　項羽劉邦の興亡を物語つたもの

磨けば益〻光り、鑽れば彌〻堅し。眞に偉大なる人物は仔細に研究するに隨ひて、一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑〻太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に、舊大名たりし華族の諸家、古社寺舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾千なるを知らず。公の祐筆（代筆）たりし太田和泉守牛一・大村法橋由己・楠長諳正虎等の文章家の手に成りたりと思しき、雄健にして生氣に富める文書、其の大部分を占めたりとはいへ、確に太閤の自筆なる

太田和泉守牛一　尾張の人　信長及び秀吉に仕へた

大村法橋由己　播磨の人　柴田勝家及び秀吉に仕へた

楠長諳正虎　足利義輝及び信長秀吉に仕へた

大政所
撫政關白の母
秀吉の大政所は尾張御器所村（今名古屋市）の人
同國中村の人木下彌右衛門に嫁して秀吉を生む
文祿二年（一五九三）歿

淺野氏
尾張中村の人
杉原某の二女淺野長勝の養女
北政所

色紙・短冊・消息の類も亦少なしとせず。西に東に遠征せる先より母なる大政所・夫人なる淺野氏、若しくは、一子秀賴等に贈りたる書狀の如きは、親子・夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。

豐臣秀吉（紀伊國高野山成慶院藏）

書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉・秀潤等の讃美の辭を加ふることこそ敢へてする能はざれ、頗る圓熟したるものにして、その中、自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字も亦用ひられ

江村專齋
豐臣時代より德川初期の儒醫
寛文四年（一六六四）歿
年一百

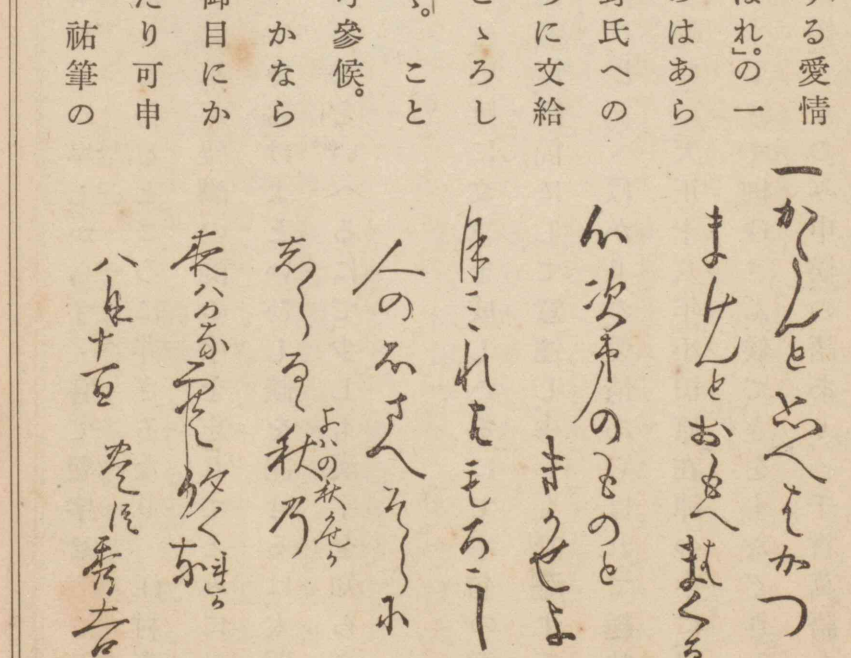
たるが、其の崩し方も無下に卑しからず。嘗て習字せしことの無き人には決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の老人雜話に、太閤の祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、とみには思ひ出でざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは、太閤の簡易を喜び、敏捷を尙びしをいへるにはあらず。

軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、字句の鍛錬なしといへども、天眞爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滯する所なし。而して、其の間に溢るゝばかりの愛情あらはれて趣味の津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年小田原在陣の中に、母に寄せたる書の中に「そもじさま御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わかく御なり候て可給候。たのみ申候」の語あり。千言萬語を費

筆蹟

一かたんと思へば
かつまけんと思
へぼまくる心次
第のものときか
せよ
月みればもろこ
し人の心さへそ
らにしらるゝ
秋の夜はかな
空かな
八月十一日
豐臣秀吉

すとも、子の親に對する愛情は此の「若くなり給はれ」の一語より適切なるものはあらじ。又その政所淺野氏への書の中には「ねんごろに文給はり御げんざんのこゝろしてねんごろにみられ」。ことし内にはひまあけ可參候。心やすく候べく候。かならずとし内に參候て御目にかかりつもる御物がたり可申候」等の句あるなり。祐筆の



豐臣秀吉筆蹟（京都高臺寺藏）

なまぐさ
腥き

撥亂反正
撥亂世反諸正。（公羊傳）
撥は治也

手に成りたる文書の中にも、彼處此處に太閤の口授に係れりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長した る人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも、古文書の上より觀察するときは、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては尤も慈悲の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。

さて、太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十四日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛と咲亂れたるを賞でて、其の下に徘徊せり。正親町帝之を聞しめし、やがて、畏くも勅使を遣はし、花の折枝に一首の御製を添へて下し賜ひしかば太閤感謝に堪へず、卽ち

龍安寺
山城國葛野郡花園村に在る細川政元創立有名な庭がある

關屋の花
吉野町の總門から下の吉野の櫻

忍びつゝ霞とともにながめしも、
あらはれけりな、花の木のもと。

と返歌を上られき。又、天正十六年の事なりけり、北山に狩して龍安寺に憩へる事ありき。頃しも春の最中なりけるに、庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却て淡雪のちら〳〵と降來りしかば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は
花をおそしとさそひ來ぬらん。

と詠まれき。逸興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、

吉野山、たれとむるとはなけれども、
今宵も花のかげにやどらん。

藏王堂
吉野町にある藏王權現を祀る

紀州征伐
天正十三年根來寺を討つ

玉津島
紀伊國和歌浦町玉津島神社

小田原陣
天正十七年北條氏を討つ

清見潟
今の東海道線興津驛の海灣

名護屋
肥前國東松浦郡呼子村の西の村

と吟じ、藏王堂にては、

歸らじとおもふ家路を入相の
かねこそ花の恨なりけれ。

と歌はれたり。巧を弄ばずして、なか〳〵に雅趣に富み、格調も亦平凡ならずして、古の撰集の中にも置きたき心地せらる。

此の他、紀州征伐のときには和歌浦・玉津島にて、小田原陣の折には清見潟にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての詠歌も少なからず。天正十六年の聚樂第への行幸のときは勿論、醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては、大宮人の昔を忍ばしめ、又時としては、古英雄の横槊賦詩の面影を想はしむ。而して、功成り名遂げたる此の千古の偉人にも、亦無常を感じたる事のありてや、

太閤征韓の本營
聚樂第
京都市の西北
昔の大内裡のあとに當る
醍醐
山城の國宇治郡
醍醐村醍醐寺
大佛
洛東方廣寺
豐臣秀吉創建
横槊賦詩
魏の曹操の故事
伊達政宗
仙臺藩主
歌人
寛永十三年(一六三六)卒年七十
細川忠興
藤孝幽齋の子
三齋と號す
歌人
豐前國主
正保二年(一六四五)
卒
年八十二

錚々 サウ
人物うすれたる様

露とちり雫ときゆる世の中に、
何とのこれる心なるらん。

と嘆きし事もありしが、慶長三年八月薨去せらるゝや、哀れにも、

露とおき露と消えにし我が身かな、
なにはのことは夢のまた夢。

といふ辭世の短册をとゞめられき。げに、太閤は伊達政宗・細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうちの錚々たる者なりしなり。

と章

確に太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短册にして、予が原本を目擊したるものゝみにても、二三十はあるならん。加之、太閤は、時には學者をして往事を談ぜしめて之を聽き、又、禪學の書の講義をも聽きたりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は、決して無學文盲ならざりしなり。(豐太閤に關する研究)

湯淺常山
名は元禎岡山藩
士天明元年(一七四一)歿
年七十四

九　曾呂利新左衞門

湯淺常山

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ」。と問ひけるにその者の對ふるやう、「臣が姓名は卽ち曾呂利新左衞門と申し候」。太閤「さては奇なる姓もあるものかな。して其の曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにてもありつるものか」と問はせけるに、又對ふるやう、「いさゝかいはれこれあり候。別にあらず。臣の拵へたる鞘は堅くして、そろりと入り、敢へてつかへず。是を以て曾呂利と申し候」。太閤「こは奇なり。また折節來らるべし」と。

他日また太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、「汝の姓名は何とか申しゝな」。對へて曰く、「曾呂利曾呂利新左衛門新左衛門」。太閤怪しみて其の重言を尋ねけるに、新左衛門の對ふるやう、「殿下先に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に臣も亦殿下重問の意に從ひ、同じく重言を以て對へ候ふなり」と。

新左衛門或時太閤に向ひ、「願はくは一日御耳の匂を嗅がせられたし」とありければ、太閤はいぶかしく思ひ「こやつ又何をかなすらん」と疑ひしが、「何はともあれ、宜し、汝がよきに嗅がれよ」と許されしかば、諸大名の御機嫌伺ひに出づる時を窺ひ、太閤の耳根に口寄せて何やら言ふ體なれば、皆々心中密かに驚き、「かやつ何を言ふらん。もしや我を讒言するものにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛する所なれば、かやつが言ふこと御用ひあらんも亦測られず」と憂ひ、各わが邸に歸りて早々數多の金銀財寶を調へて、密かに曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山嶽の如く集ひければ、太閤の御前に出で謝して言へるやう、「殿下一日の御耳を拜借し、其のかうばしき匂を嗅ぎたる効能によりて、金銀財寶山嶽の如く集ひ來りて殆ど坐する餘席之なく候。これ全く殿下御耳の効能なり」とありければ、太閤も亦呆然として驚きけりとなん。

また或日の事なりしが、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗るその功ありける程に、太閤の申しけるに、「何なりとも汝の望むものを取らせん」とありけるに、新左衛門の言へるやう、「臣敢へて大いなる望も之なく候。唯紙袋二つほど米を賜はりたし」。太閤「そはいといと易きことなり。あまり寡欲の至ならずや」とおほせあり

けるに、新左衛門「これにて澤山なり」と申して退出なしゝが、やがて二つの紙袋を張り拔き、數十百人を雇ひ來りて太閤の御前に出で、「前日御約定の米これに賜はりたし」とて米倉二戸前をおほうたりけるにぞ、さすがの太閤もこれにはあきれて、しばし言句もなかりけるとぞ。

又或日の事なりしが、嘗て太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ、之を庭の泉水或は其の近邊に放ちて娛樂となしけるが、程經て見厭きたりとて近習の者に、何ぞ一用を言ひ出づる者には之を與へん」と申されけるにぞ、皆々大いに喜び、「臣は之を紙押になさん」と言ひ、或は臣は金の茶釜の蓋もなければせめては之を以て其の蓋の取手になさん」と言ひ、或は何と言ひ、かと言ひて各一つづつ賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、「臣は人類の角力も既に見厭きしことなれば、此の蟹を集へて角力を致させんと存ずるなり」と言ひければ、太閤、角力とありては、五個や十個にては其の興薄かるべし、悉く持ち行くべし」と殘れる蟹を皆新左衛門に與へけりとなん。其の頓才實に驚くべく感ずべし。（常山紀談）

一〇　曾我兄弟

森林太郎

森林太郎
鷗外と號す
文學者
醫學者
醫學博士
文學博士
陸軍軍醫總監
帝室博物館總長
大正十一年歿
年六十一

伊出
建久四年五月源頼朝富士野の狩のをりの旅館のあつた處
今駿河國富士郡白絲村狩宿
富士山の西麓の裾野
そこに曾我兄弟を祀る曾我八幡といふ小祠がある

場所　（伊出の農家）

人物　（曾我の從者鬼王丹三郎登場してあり、そこへ五郎登場）

丹三　お兄上様がお歸りなされて、

鬼王　お待兼でございます。

五郎　さうか。兄上は歸らしやつたか。

（十郎奥より登場）

十郎　五郎、待つてをつたぞ。（從者等に）そち達は暫時遠慮いたせ。

從者等　はあ。（退場）

十郎（小聲にて）五郎。いよ〳〵今宵ぢやぞ。扨、工藤が假屋ぢやがな。案内は豫て知つてをるが、精しい様子を探りたさに、けふ午過の事であつた、大幕の間を覗いて、ふと家人等に見咎められ、ゆくりなく酒宴の相伴をいたいた。客には吉備津宮の宮司がをる。宮司はさして妨にもなるまい。かう何もかも分つて見れば、結句見咎められたのが、僥倖かとも思うたが、又つくづくと思ひ返せば、憖（ナマビイ）に面を曝して、若し用心でもせられては、諺にいふ毛を吹いて疵を求めたやうなもの、唯そればかりが氣懸りぢや。

毛を吹いて
古之金二大體一者不二吹レ毛而求二小疵一（韓非子）これから轉じた諺

憖（ギン）
なまじいに

曾我
相模國足柄下郡下曾我村
東海道國府津の北一里

冠者
元服した少年

五郎（小聲にて）なに。用心をいたいたと申して、何程の事がござらう。あゝ、時節到來、喜ばしや。此の上は冠者原に、昨夜したためた文を持たせ、曾我へ返さうではござらぬか。

十郎（小聲にて）さうぢや。後れては門出の邪魔ぢや。鬼王、丹三。

兄弟　これへまゐれ。（二人登場）

二人　はあ。

十郎　そちたちを呼うだは別儀でない。雨中夜陰の遠路ゆゑ、苦勞には思はうが、今から曾我へ使に參れ。

鬼王　そんなら今宵、

丹三　お二人様が

二人　お討入りになりまするか。

五郎　しつ。

十郎（小聲にて）いや。そち達には隱し果つべき事でもない。さりながら、あさましき此の同胞に年頃仕へし幸なさよ。報いせんとはしつれども、我等の力及ばねば、其の儘けふの別になつた。ゆるしてくれい。

鬼王　勿體ないお詞ながら、それより今宵の御供に、

丹三　どうぞお連れ

二人　下さりませ。

五郎　いや、それはならぬ。曾我にござる母の許へ、遣るべき使者は外にない。

鬼王　そんなら、どれ程願ひましても、

五郎　ならぬ。（起つ）

十郎　（起つ）篤と胸を落ち着けて、得心いたいて立つてくれい。

（兄弟奥へ退場）

鬼王　こりや、丹三。伊賀の山田の冠者が事を、お主は聞いたことはないか。

丹三　いゝや。知らぬ。それがなんといたいたのぢや。

鬼王　さいつ年、伊賀の國の住人で、山田の小三郎惟行と云ふ六波羅殿の郎黨があつた。それが保元の軍に八郎御曹司と對陣して、討死と心を定め、一人の冠者に故里への言傳を誂へた。すると其の冠者がな、口惜しい仰を承つたと云うて、主より先に敵陣へ駈込うで討死した。

丹三　ふん。分つた。我々二人も死ぬるまでぢや。

鬼王　さうぢや。死ぬるより外、途はない。さりながら御兄弟と我等とは、

まだ總角の昔より

四人はなれぬ中なれば、

尊き卑きのけぢめさへ

忘れて年を經しものを、

今宵のお供が愜はぬとは、なんたる無念の事ぢややら。思へば胸が煮え返る。

丹三　おう。さもあらう。河津家の敵は我等が敵ぢや。討ちたい心に高下はない。なぜ下司には生れたやら。

（二人手を取り、泣く）

鬼王　あゝ。めゝしい歎ぢや。（雨の音）折好く降り來る雨の音に、紛れてこゝで刺違へ、三途の川で御兄弟が、本意を遂げて來られるのを、お待受申すまでぢや。お支度最中のお二人が、よも聞咎めはなさるまい。

（二人胸を開き互に、刄を擬す）

鬼王　いざ。

丹三　いざ。

五郎の聲　（奥より）やあ、兩人、暫く待て。

（十郎五郎登場、打入の支度、記念の品を持つ）

十郎　神妙なそちたちが志は、生々世々忘れぬぞよ。さりながらそちたちは、稚い時に親に別れ、母を殘して死にゝ行く子供の心を知らぬと見える。なんの我々兄弟が、そちたちを賤しん

具（そなう）ともにつゐきに

で、具して行かぬと申さうぞ。どうぞ我等になり代つて、母上に逢うてくれい。

（遺書と記念の品とを出す）

此の文と小袖とは母上に奉る。貧しき中に飼ひならしゝ二匹の馬には鞍を置いて、祐信主にまゐらせる。又弓矢と行縢（むかばき）とは、そちたち取つて記念（かたみ）にせい。

鬼王　さては死ぬにも死なれませぬか。

五郎　時移つては詮ない事ぢや。

十郎　疾う〳〵まゐれ。

二人　はあ。

（鬼王起ち、厩より馬を牽出し、丹三郎と共に、記念の品を結ひ附け、蓑笠を着く）

鬼王　そんならこれでお暇をいたします。

丹三　此の上は只御本意を首尾好うお遂げなさるやう、切にお祈り

曾我兄弟（劇）

二人　申しまする。

十郎　そちたち二人も

兄弟　堅固で暮せ。

（鬼王・丹三郎退場○十郎・五郎疊牀几に坐す）

五郎　兄上、今鹿島立するからは、これが互の顔の見をさめ。

（手を取る）

十郎　父の命の血をわけし

五郎　わが兄上のかんばせも、

十郎　家弟汝が面影も、

在すが如き思の種、

兄弟　お懷かしうござりまする。

（鐘の音）

十郎　もう亥の刻ぢや、いざ、打立たう。いざ。

五郎　いざ。

（雨の音）（幕）

（鷗外全集）

二　幼き日

一

加藤武雄

加藤武雄
小說家。
明治二十一年
神奈川縣津久井
郡川尻村生

神嘗祭の頃になると、山茶花の花が咲く。山茶花の花が咲く頃になると、家の庭から眺めやられる國境の連山の頂が斑に雪を置きはじめる。

「おゝ寒い！寒い筈だ。今朝は山に雪が來たぞ。」

さういつて遠山の雪に瞳をあげる心持、あのきいと心がひきしまるやうな新鮮な心持は、山國に育つた人ならば、誰でも經驗するところであらう。

其の山の雪が朝毎に白い部分を增していつて、やがて眞白になる頃には、「富士隱し」と私達が呼び慣らしてゐた一際高い峯の肩のところにある富士山がひよつこり額をのぞかせる。多分光線の工合なのだらうと思ふが、其の頃私達は、富士山に雪が積つてそれだけ山の背丈が高くなつたのだとばかり思つてゐた。

梯形になつてゐた頂部の一角だけがほんのちらりと見えるだけなので、勿論八朶の花にたとへられるあの全容を髣髴すべくはなかつたが、それにしろ、

「己がの村からは富士山が見えるぞ」

と隣村から來る學校友達には、それを自分のものゝやうに自慢したものだつた。

が、其の富士山も、寒い盛りの三十日か四十日の間、ちらりと額を見せたゞけで引込んでしまふ。せい伸びしてちらりと覗いて見た――まあ、さう言つた感じなのだ。富士山が見えなくなる頃には、山々の雪も消え初めて、匂やかな紫紺の山肌が、光を含んだ藍色の空にほのめく。どうかすると其の山々の輪廓が、一抹の夕雲に溶け込んでしまふ。すると、其の夜から降り出した柔

かな雨が二日も三日も降りつゞく。それがあがると、もう春なのだ。北相模の高原の山裾の村には、かうして春が訪づれるのだ。

二

春が深くなると共に麥が伸びる。桑が芽を吹く。麥畑桑畑の間を帶のやうに伸びた野道を十二三町、二つ三つの部落と一つの驛とを通りぬけて、その驛のはづれの高臺にある小學校へ、私は尋常を四年、高等を四年、前後八年通つたのである。

私は偏屈な子供だつたので、往きにも復りにも友達の群を離れて一人の時が多かつた。私は一人淋しく其の野道を歩きながら、麥笛をこしらへては吹き鳴らした。麥笛、田舍育ちの人達は皆知つてゐよう。あの柔かな麥の莖を二三寸の長さに切つて

こしらへた小さな笛、唾をつけて吹くと單調な音を出す小さな笛、私は好んでそれを吹いた。それを吹き〳〵長い野道の盡きるのを忘れて歩いた。私は今でもあの麥の莖の甘酸つぱい舌觸りをあり〳〵と想ひ起すことが出來る。其の頃の私は悲みをも喜をも、淋しさをも、あこがれをも、あの單調な麥笛のしらべの中に、自由に歌ひ出すことが出來たのだつたが――。麥笛で思ひ出したが、まだ笛にする事が出來るまでに麥が大きくならないで、黑い土に飛白の模樣を置いてゐる頃、だから勿論冬のうちのことだが、私達はよく麥踏みといふ事をさせられたものだ。霜柱で根が拔けあがるのを防ぐため、またより強く伸びる力を刺戟する爲に、二三寸位に生えあがつた麥の芽をわざと踏みつけてやるのだが、其の麥踏みの時、土の中から栗の實だ

の樫の實だのが、ころ〳〵と足もとに轉び出る事があつた。こんな處にどうして？と、不思議に思つてきいて見ると、祖父は次のやうな事を話してくれた。それは懸巢が山から啣へて來てそこへ埋めておいたのだ。懸巢はそれを埋める時、空にある雲を心覺えにして、その雲の下に埋めるのだが、其の心覺えの雲はすぐに動き去つたり消え失せたりする。かはいさうに懸巢の奴、折角埋めておきながら、見つけることが出來ないのだ――。

懸巢

私は子供心に心から懸巢を憐んだことがあつた。それは唯懸巢ばかりの悲みではないといふことを、二十年後の私はよく知つてゐる。

懸巢　燕雀類の鳥の名　かしどり

モケダウ
黐竿

懸巣といふ小鳥を諸君は知つてゐるであらう。小鳥といへば、私の生れた村のあたりには實に小鳥が澤山ゐた。高等科の二年だつたと思ふが、私の仲間に目白を捕つてそれを飼ふことが一つの流行になつて、「おれは三羽もつてゐる。」「おれは五羽もつてゐる。」などと自慢しあつたことがあつた。――だが、何といふへまな少年だつたらう。私はどんなに黐竿を振廻して見ても、一羽も捕ること事が出來なかつた。友達に一羽貰つたやつさへ、餌をやる時に逃してしまつた。

三

數へ年の十五の春に學校を卒業した。十五の春、私はその時始めて春の哀しみを知つた。――それでなくてさへ沒落の運命にあつた私の家は、其の前の年の暮に火事を出して、何も彼もす

ソンキョ
蹲踞
うづくまる

つかり燒いてしまつた。唯一つ燒け殘つた裏庭の土藏の廂の日溜りに蹲踞つて、「東京苦學案內」といふ本を讀んでゐると、そこへ父がやつて來た。父は私の手から其の本をとりあげて一寸表紙を見て、默つて私の手に戻したが、其の時の父の微笑は淋しかつた。

卒業式が濟んだあくる日に、卒業記念として學校附屬の樹栽地に苗の植附に行つたことも忘れがたい思ひ出である。三十人ばかりの卒業生は、先生たちや村役場の吏員達に率ゐられて、幾千本の杉苗を車につけて、其の山深い樹栽地へと出かけて往つたのであつた。山と山との間の溪流に沿うた谷間の小路を一里近くも入つたところ、そこに山裾の斜面を切開いて、私達は其の杉苗を植ゑ附けたのだつた。私と私の一番仲の善かつたK

とTとの三人は互に祝福し合ひながら、殊に念入りに一本づゝの苗を植ゑて置いた。

「どんな事があつても、此の三本は枯れる事は無いよ。」

「一番大きく、一番高く――どうかしつかり育つてくれ！」

「十年經つたら三人で見に來ようよ。」

三人はこんなことを話し合つた。そして手拭の端を切つてそつと其の根元に卷いておいた。KもTもY市の中學へ行くことになつてゐたが、私だけはどうするともきまつては居なかつた。並べて植ゑた三本の杉の木――其の中でも、私の分だけは無事に育ちさうもない氣がした。

漸く苗を植ゑ了へた私達はもう日が暮れて暮靄があたりを立ちこめる頃になつてから、やつと山を降りて部落の方へ出て來

フェーヤ・ウェル Farewell 御機嫌よう 左様なら 告別の辭

た。仲の善かつた同志が三々五々と打連れて、いろ〳〵と話しながら、其の溪流に沿うた山間の道を歩いた。うす暗く靄のこめた路傍の林で時々小鳥の鳴く聲がした。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

部落の方へ出ると、其の八年の間一緒に學んだ友人たちは、五六人づつ、二三人づつ群を離れてそれ〴〵の家路へと別れて行つた。其の「さやうなら」がつまりお互のフェーア・ウェルであると共に、又私達自身の少年時代への別れの言葉ではなかつたか？

「さやうなら！」

あの友達の大部分とは、その時ろく〳〵顔も見合はさないで、唯その簡單な一語を發して別れたまゝそれきり一度も逢はない

のである。――あの時別れて行つた友達の後姿、それは「少年」そのものゝ後姿だつた。私は今でもなつかしくそれを思ひ浮べる、その春の夕の靄の中に永久に消えて行つてしまつた後姿を。

（わが小畫板）

三　童謠五首

野口雨情
名は英吉
詩人
明治十五年茨城縣磯原町生

一つお星さん

一つ　お星さん、
海の上。

一つ　お星さん、
屋根の上。

野口雨情

千鳥は　渚で
日がくれる。

馬は厩で
日がくれる。

一つ　お星さん、
海の上。

一つ　一軒屋の
屋根の上。（童謠十講）

北原白秋
名は隆吉
詩人
歌人
明治十八年福岡縣柳河町生

蜻蛉の眼玉

北原白秋

蜻蛉の眼玉は大かいな、
銀ぴか眼玉の碧眼玉、
白い白い眼玉、
地球儀の眼玉、
忙しな眼玉。

眼玉の中に、
小人が住んで、
千も萬も住んで、
てんでに蟲眼鏡で、あつちこつち覗く。

パノラマ
Panorama

上向いちや、ぴか〳〵〳〵。
下向いちや、ぴか〳〵〳〵。
くる〳〵 廻しちや、ぴか〳〵〳〵。

玉蜀黍にとまれば玉蜀黍が映る。
雁來紅にとまれば雁來紅が映る、
千も萬も映る。
綺麗な〳〵
五色のパノラマ、綺麗な。

ところへ、子供が飛んで出た。
黐棹ひゆう〳〵 飛んで出た。

さあ逃げ、
わあ、逃げ。
麥稈帽子が追つて來た。
千も萬も追つて來た。
おゝ怖、
あゝ怖。
ぴか〳〵〳〵、ぴつかぴか。
くる〳〵、ぴか〳〵、ぴつかぴか。（トンボの眼玉）

兄弟

喧嘩に負けて
弟が泣きだす。

島木赤彦

島木赤彦
本名久保田俊彦
歌人
明治六年長野縣
上諏訪町生

喧嘩に勝つて
兄も泣きだす。

泣いた顏から
鼻ん棒が垂れる。
垂れる鼻ん棒を
仔犬が舐める。

仔犬に顏を
舐められて、
弟が笑ひだす。
兄が笑ひ出す。

葛原齒
詩人
教育家
明治十九年廣島縣生

笑ひたくても
笑ふな弟。
笑ひ出しては
喧嘩が出來ぬ。（赤彦童謠集）

寺から下りて

葛原　齒

山のお寺の　にはとりが、
あそびにおりて、日が暮れて、
里の子供が　三人で、
送つて行つて　やりました。

西條八十
詩人
明治二十五年東京生

その次の日に、寺の兒が
あそびにおりて、日が暮れて、
一人でかへる　坂道は、
月が送つて　やりました。

寺の和尚が　三日目に、
あそびにおりて、日が暮れて、
一人でかへる　小松原、
狐がとほくで　なきました。（かねがなる）

ほそみち

西條八十

こゝはどこのほそみちぢや。

とうさんのあたまのほそみちぢや。
ちよつととほしてくださんせ。
ごようのないものとほしやせぬ。
おもちやのじどうしやはしらせに。
どこからどこまではしらせる。
まゆからつむじへはしらせよう。
とほりやんせ。とほりやんせ。
ゆきはよい〳〵かへりはこはい。
ひるねのとうさんめをさます。（赤い鳥）

八波則吉
國文學者
第五高等學校教授

一三　小兒は詩人

八波則吉

子どもの思想には飛躍がある。われ〳〵大人にはなか〳〵想像も及ばないほどの飛躍がある。子どもが天才であり、詩人である所以であらう。小林章子さんの「星の子供」を見ても、

星の子供、
小さな子供、
母さんの星に
抱きついた。
これ位までは、われ〳〵にも分るが、
とんぼの家は

核カク

物事ヲ理ヲ通シテ論ズ

まつ暗で、
星樣一つ
とんぼの目玉。

に至つては一寸想像がつきかねる。しかし、子どもの世界は子どもの領土、尋四の女兒が余の師匠を務めてくれる。曰く、「お父さん、とんぼの家といつて、別に家があるのではないのです。だ、とんぼの目玉がお星樣見たいに光つてるので、それでさういつたんでせう。」――成程さうか。大男總身に智慧が廻りかね……、いや、智慧が廻り過ぎて、理窟ぽく考へて分らなかつたのだ。われ〳〵大人は、論理的に物事を考へようとする。これでは詩が出來ないのは勿論、他の人の詩も讀めない譯だ。詩は直覺である。一掴みに核心を掴んだものである。

汽車のけむり、
蛙みたいに
クワッ、クワッ、クワッ。

「何だ、謎見たやうだね。」と首を捻る學者が多いだらうが、學者に童謠が分るまい。

松、蠟燭
つけてるねえ。
さぶいから
火こしらへてるの。

松のみどりを蠟燭と見立てたまでは合點が參つても、「寒いから火こしらへてるの。」と問ふに至つては、餘りに奇拔で、突飛で、子どもらしいといへば非常に子どもらしい思想で、大人には思ひも

寄らない想像である。だが、突飛な、奇拔な、而もあどけない想像が分らなければ、詩――就中子どもの詩は味はふ事は出來ない。昨年の今頃であつた。試驗の立番をして、暇つぶしに童謠の眞似事を試み、拙作駄作を多く得た中で、

しいんと蟬が
ないてゐる。
ねえさん襷は
赤だすき、
張物板から
ほけが立つ。

梅雨晴の氣分を歌つたものが、幸に宅の子どもの氣に入つた。分るかね？分るとも！繪を書いて見ようといつて、張物をして

ゐる、ねえさんかぶりの人物を描いて、背景に大きな木を二三本かいた。蟬は？此の木に止つて啼いてゐる。なぜ蟬の繪を描かない？描いたら駄目さ！なぜ？だつて、だつて、ねえ兄さん、蟬の繪は描かない方がいゝでせう？

今一つ。

かぼちやが
なつた。
ひき臼、
き臼、
臼のべそ
出べそ。
ごろ〳〵さんに

オルガン Organ

いつてやろ。

これが又ひどく兒どもの氣に入つて、僕が譜を附けてみようと言つて、尋六の男兒は、オルガンを彈き〳〵、到頭一つの譜を作り出した。さうして、「ごろ〳〵さんの所に骨が折れた、ピヤノならば本當の雷が聞えるんだがな。」と、生意氣な事まで言つてゐた。童謠の話ではないが、曾て小學校の讀本を編纂してゐた時、入門に猿蟹合戰の童話を入れて

カタキウチヲ　スル　コト　ニ　ナリマシタ。
クリガ　トビツキマシタ。
サルガ　ヤケド　ヲ　シマシタ。

と書いたら、文豪の某博士が、これは餘りに思想が飛び過ぎてゐる。文に溝がある。子どもには分るまい、といふ非難をされた。

鳥居勝商
三河の人
德川家康の臣奥平信昌に仕へた
天正三年(三三五)節に死す年三十六

湯淺常山
名は元禎
漢學者
岡山の藩士
天明元年(一七八一)歿
年七十四

勝頼
武田勝頼
奥平九八郎
初め今川氏に屬したが天正元年父貞能と共に家康に歸して長篠城を賜はつた

長篠
三河國南設樂郡長篠村
豐橋市の北七里餘豐川の上流にある

いや、子どもは却てこんな所を喜びますよ。どうか知らん。時恰も博士の坊ちやん――尋一か、尋二位の――が座敷へ來られた。「おい、坊や、此處を讀んで見ろ。」(讀む)「分るか。」栗が爆發したんでせう。」博士は思はず手を拍つて、「爆發はよかつた！傑作傑作！」。

あらゆる子どもは詩人である。詩人の思想には飛躍がある。聯絡の無い所に聯絡を出すのが、蓋し詩を見出す所以であらう。

(教育に安住して)

一四　鳥居勝商

湯淺常山

天正三年、勝頼、奥平九八郎信昌が三州長篠の城を圍み攻む。東照宮援兵を織田家に乞はせ給ひ、後卷の謀をめぐらし給ふ處に、

東照宮
徳川家康の薨後に賜はつた諡

織田家
織田信長

雁峯が嶺
長篠城の西一里

城中糧米既に盡きんとせしかば、此の旨を告げ奉らんため、鳥居強右衛門勝商に命じて、密かに城を出す。鳥居、「逃れ出づる事を得ば、向ふの雁峯が嶺に煙をあぐべし。三日を過ぎて、又かの山に煙を兩度あげば、後卷なしと知り給ふべし。三度あげなば、後卷あることを知り給へ。」と約しければ、信昌、鈴木金七郎を鳥居にそへて遣はす。

五月十四日の夜、城の西なる山の岩根をつたひて川に入る。寄手素より大野川・瀧川の水底に繩を張りて、鳴子を懸けたれば、通るべきやうもなし。二人は水練の達者にて、川の淺瀨はよく知りつ。小脇差を抽きて、川底を潛り、繩を切つて通りしかば、からからと鳴りけるを、番の兵ども怪しみけるに、其の中に一人、「五月雨には、かゝる川をば、鱸の通るならん。」と言ひければさて止みぬ。

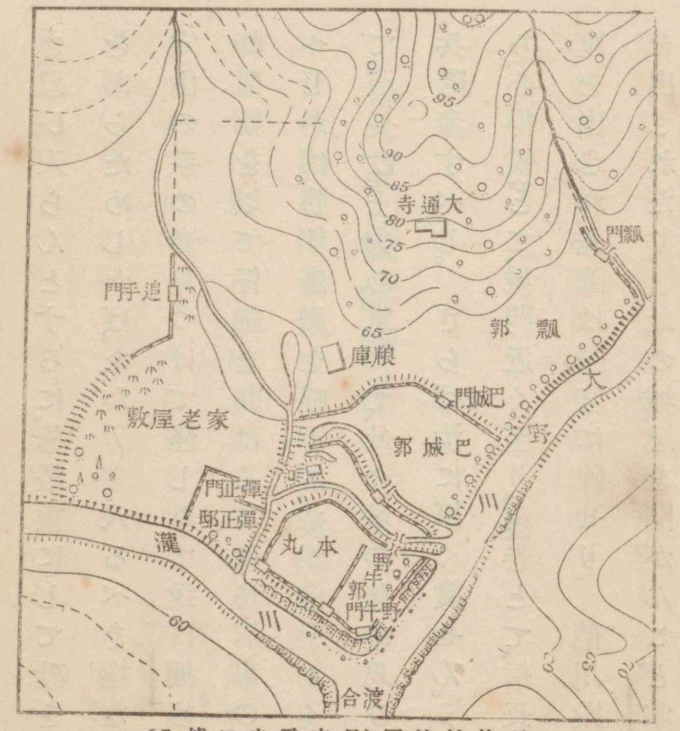
鱸 ロ すゝき

廣瀨
長篠城の南半里

十五日
天正三年五月

岡崎
徳川家康の居城

二人は早瀧の下、廣瀨といふ處に上り、雁峯が嶺にて煙をあげ、十五日に岡崎に參りてしかくの由を申す所に、信長其の日岡崎に着陣せらる。鳥居は「信昌猶心許なくや候らん。忍びて城に入る事を得ば、はや後卷候べき事、審に申さん。」とて引返す。鈴木は「信昌が父、美作守貞能に告ぐべし。」とて、鳥居に別れけり。



長篠城地圖（日本戰史に據る）

審 ツマビラカ 判 査 議

鳥居、雁峯が嶺に上り、合圖の煙三度あげて後、篠原といふ處に往き、忍び入らんとするに、柵嚴重にして砂をまき、出入の人の足跡をあらためしかば、なか〳〵入るべき樣なくてためらひけるを、穴山の手の者見つけて、怪しみて遂に搦め取りけり。勝頼、逍遙軒信綱を以て仔細を問はるゝに、鳥居、事の由をありのまゝに答へしかば、勝頼鳥居を呼んで、『汝が命を助くべし。汝、城際に往きて、『信長は上方の軍にて、此の城の後卷思ひも寄らず。』と言はゞ、城兵降參すべし。さらば汝に厚く賞せん。』と言はれしかば、鳥居乃ち「心得候」とて、城門近く至り、「後卷とて、信長御父子、岡崎まで昨日旗を出され、先陣は一宮に陣せり。徳川殿御父子、野田まで御馬を出されたり。此の城、運を開かんこと掌の中にあり」と言ひければ、甲州の者ども大いに驚き、鳥居を引連れて、勝頼にかくと申

搦（レヤク）からめ　手

掌（レヤウ）たなごゝろ　つかさどる　大据　典中

篠原　長篠城の西南瀧川を隔てゝ相對する處

穴山　穴山梅雪　信玄の姉の子

信綱　信玄の弟

一宮　三河國寶飯郡桑富村にある　長篠の西南一里半

野田　三河國南設樂郡千秋村にある　長篠の西南二里餘

せば、勝頼大いに怒つて、城に向け、磔にして殺しけり。長篠にて勝頼敗北して後、信長を始め、鳥居が無雙の忠なることを感じ、作手の甘泉寺に懇に葬られけり。（常山紀談）

一五　優游涵泳

室　鳩巣

諸君の如きは、春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歳月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々として勉めて息まざるにありぬべし。もし悠々として日を渉りなば、年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でていかに悔ゆとも、何の益かあるべき。即ち今、余が身の上にて候。されば古詩にも、

磔（タク）はりつけ　刑

懈（カイ）おこたる　怠

恃（タノ）む

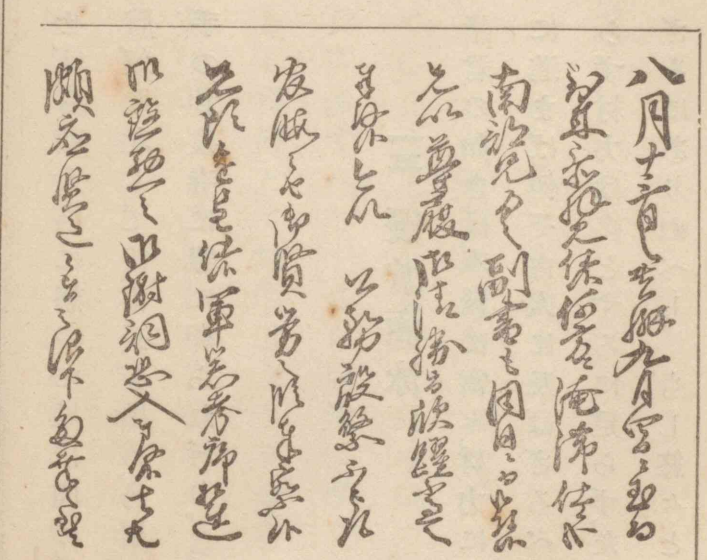
作手　三河國南設樂郡巴村にある　長篠城の西方の諸村の總稱

室鳩巣　名は直清　徳川幕府の儒官　享保十九年（一七三四）歿　年七十七

古詩　文選に出て居る作者未詳の漢代の詩

陶淵明
名は潛
晉の隱逸

八月十三日之貴翰九月四日に至而到來忝拜見仕候何方に淹滯仕候哉南部兄より之副書も同日に而御座候先以尊履御清勝旨欣躍不レ遇レ之奉レ存候今以公務殷繁不レ被レ取二官暇一候由御賢勞之段奉レ察候先頃進呈仕候軍器考序相達御照勘之御謝詞恐入奉レ存候去共頗應賢意候旨被二仰下一多幸之至に奉レ存候同文通考序之儀蒙レ仰委細御書體被二仰下一且又別副に目錄題



注被レ記レ之候被レ入二御念一候儀と奉レ存候黔驢技窮可レ申候へ共先如何樣共構思仕候而追而可レ愛二御指敎一候
九月十八日
室新介（花押）
新井勘解由樣
座前

朱文公
朱熹
宋の儒學者
陶侃
晉の政治家
陶淵明の曾祖父

少壯不二努力一、老大徒傷悲。

といひ、陶淵明も、

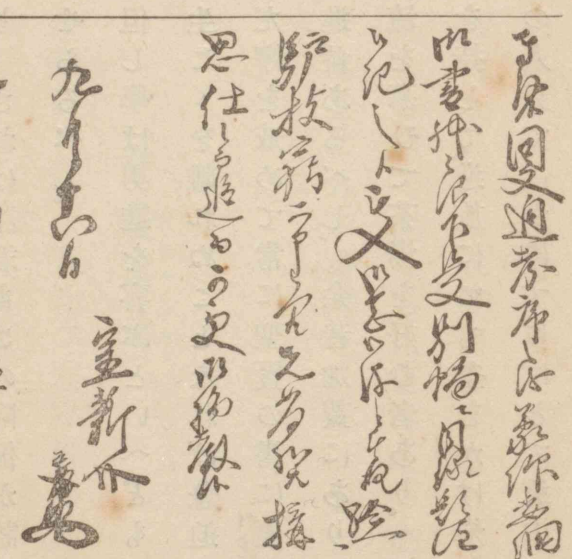
盛年不二重來一、一日難二再晨一。
及レ時當二勉勵一、歲月不レ待レ人。

といへば、古人も此の感懷を同じうすとぞ見ゆる。

此等の詩句、時々吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。

又世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

勿レ謂二今日不レ學而有二來日一。
勿レ謂二今年不レ學而有二來年一。



日月逝矣、歲不二我延一。嗚呼老矣、是誰之愆。

言簡にして意も明白なり。折節打誦じて自ら警むるによかるべし。

それよりも余が常に愛するは陶侃が語なり。

大禹聖人、乃惜二寸陰一。至二於衆人一當二惜分陰一。豈可二佚遊荒廢生無益一於時一死

明が詩も曩祖以來の家法にこそと思はる。凡そ人と生れて學に志ありといふきはの、生きて時に益なく死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ちはてんは、いと口惜しかるべきことなり。されば諸君もこの陶侃が語をもて自ら激勵して日夜勤勉せらるべし。

但し學は勇進を喜ぶといへども又急迫なるを嫌ふ。とかく一生こゝを離れぬことなればだ懈を戒めて常に聖賢の書に優游涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。余昔加賀にありし時、士族の中に紹鷗・利休が風流を慕ひて茶湯を好む者あり。江戸に行役するとき道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ炭をおきて樂みとしけるを、同行の人見て、「いかにすけばとて道中にてはやめよかし」といへば、そ

紹鷗
武野仲村
和泉國堺生
織田信長の茶道の師
弘治元年(一五五二)歿

利休
千宗易
和泉國堺生
紹鷗の門人
豐臣太閤の茶道の師
天正十九年(一五九一)切腹
年七十一

の人いふは、「道中とて一生の外にあらばこそ、これも一生の日數の内なればわが茶湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん」とてその後もやめざりき。學者の道に志すも此の人の茶湯を好むが如くなるべし。（駿臺雜話）

一六　凌霄花

吉村冬彦

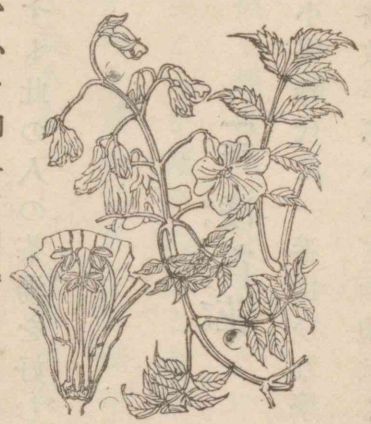
吉村冬彦
本名寺田寅彦
物理學者
文學者
東京帝國大學教授
理學博士
高知縣高知市生

小學時代に一番嫌ひな學科は算術であつた。いつでも算術の點數が惡いので、兩親は心配して中學の先生を賴んで、夏休中先生の宅へ習ひに往く事になつた。宅から先生の處迄は四五町もある。宅の裏門を出て小川に沿うて少し行くと村外れへ出る。そこから先生の家の高い松が近邊の藁屋根の植込の上に

ラツ　絡まとう
からまる。
一纏
車馬絡繹

デウ　大ウ
繞めぐる
めぐらす。
ヘイ　坪つぼ

聳えて見える。これに凌霄花が下から隙間もなく絡んでゐる。毎日晝前に母から注意されていや〳〵ながら出て行く。裏の小川には美しい藻が澄んだ水底にうねりを打つて搖れてゐる。其の間を小鮒の群が白い腹を光らせて時々通る。子供等が丸裸の背や胸に泥を塗つて小川へ入つてぼちや〳〵やつて居る。附木の水車を仕掛けて居るのもあれば、盥船に乘つて流れて行くのもある。自分は羨ましい心を抑へて川沿ひの岸の草をむしりながら、石盤を抱へて先生の家へ急ぐ。寒竹の生籬を繞らした冠木門をはいると、玄關の脇の坪には蓆を敷き竝べた上に、よく繭が干してあつた。



らづかんぜうの

玄關から案内を乞ふと色の黑い奥さんが出て來て「暑いのによう御精が出ますねえ」といつて座敷へ導く。綺麗に掃除の屆いた庭に臨んだ縁側近く低い机を出してくれる。先生が出て來て、默つて床の間の本棚から算術の例題集を出してくれる。横に長い黄表紙で、木版刷の古い本であつた。「甲乙二人の旅人あり、甲は一時間一里を歩み乙は一里半を歩む」といつた樣な題を讀んで其の意味を講義して聞かせて、これをやつて御覽といはれる。先生は縁側へ出て欠伸をしたり、勝手の方へ行つて大きな聲で奥さんと話をしたりして居る。自分は其の問題を前に置いて、石盤の上で石筆をこつ〳〵いはせて考へる。座敷の縁側の軒下に投網が吊りさげてあつて、長押の樣なものに釣竿が澤山掛けてある。何時間で乙の旅人が甲の旅人に追ひ着くか

水洟（スイイ）はなしる。

といふ事がどうしても分らぬ。考へて居ると頭が熱くなる。汗が坐つて居る脚ににじみ出て、着物のひつつくのが心持が悪い。頭を抑へて庭を見ると、笠松の高い幹には眞赤な凌霄花の花が熱さうに咲いてゐる。よい時分に先生が出て來て「どうだ、むづかしいか、どれ。」といつて自分の前へ坐る。羅紗切れを丸めた石盤拭きで隅から隅まで一度拭いて、そろ〳〵丁寧に説明してくれる。時々分つたか〳〵と念を押して聞かれるが、大方それがよく分らぬので、妙に悲しかつた。俯向いて居ると、水洟が自然に垂れかゝつて來る。それをじつと堪へてる。愈々落ちさうになると思切つて啜り上げる。これもつらかつた。晝飯時が近くなるので、勝手の方では皿鉢の音がしたり、物を燒く匂がしたりする。腹の減るのもつらかつた。繰返して教へてく

徳富健次郎
文學者
號は蘆花
明治元年肥後國
水俣町生

れても、結局は餘りよくは分らぬと見ると、先生も悲しさうな聲を少し高くすることがあつた。それが又妙に悲しかつた。「もうよろしい、又明日おいで。」と云はれると、一日の務が兎も角すんだやうな氣がして、大急ぎで歸つて來た。宅では何も知らぬ母が色々涼しい御馳走を拵へて待つて居て、汗だらけの顏を冷水で清めちやほやされるのが又妙に悲しかつた。（藪柑子集）

一七 九十九里濱

徳富健次郎

濶さ一町餘、長さ十六里半の此の大きな砂濱は、人の子の生活の戰場で、同時に其の遊び場であります。風雨の中の舟の引揚げ、一時を爭ふ漁舟の乘出し、地曳の網の揚り際、男は赤裸、女は眞顏

ホン 犇ひしめく

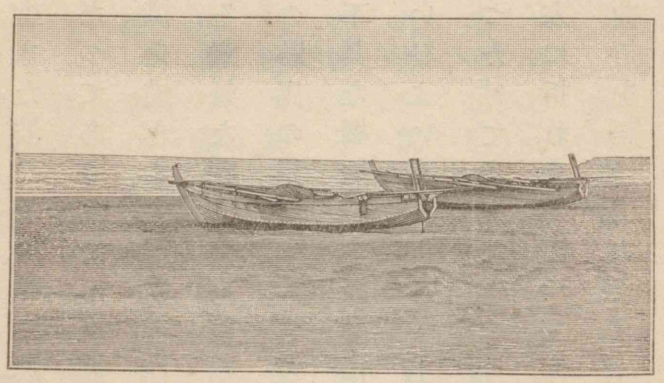
大東
大東崎
千葉縣夷隅郡大東村にある岬
飯岡の岬
千葉縣海上郡飯岡町にある岬

で曳々聲を出す時は、自然を相手の戰爭といふ感が犇々と人を壓します。併し風雨が過ぎて二三日、右に大東、左に飯岡の岬も歷々と見えて、空青々と、日麗らかに、心地好い程の南風がそよ吹いて、萬里一碧の海の笑顏に愛嬌ばかりの白波を立てる日は、向ふの方でながらめ貝を搔く男もまつぱだかで子供の風呂桶程ある飯櫃引寄せて、立ちながら茶漬を食つてゐる赤銅作の仁王樣も、一張羅の晴着を汗にしまいとして、それを風呂敷に包んで負つて、紅い襦袢一つになつて波打際を行く田舍娘も、街道の砂埃に引換へてしつとりと彈力ある波打際の砂路を荷馬車挽かせて行く向鉢卷の男も、自轉車の小僧も、砂の上に坐つて日がな一日暢氣に網を繕つてゐる爺さんも、子供のおもちやに小蟹を捕らうとして懸命に兩手で穴を掘つてゐるかみさんも、人形の

ボク 蹼 水かき

カンヴァス
Canvas

樣な兩手を擧げて家鴨の蹼の樣な兩足でよち〳〵走つて來る三歲の女兒も、其等を見てゐる私共も、鬼がゐない賽の河原の砂遊びをしてゐる一樣の子供としか思はれません。誠に人生は嚴肅であります、又快活であります。



九十九里濱

此の砂濱は大きな畫布（カンヴァス）であります。色々の物が色々の物を描きます。風が掃ひ、雨が流し、波が洗ふに任せてゐる此のカンヴァスの上に、勿論不朽とか無窮とかは許されません。しかし刹那の物にも人間の不朽よりめでたい物はあります。

第一にめでたい波の手の跡を御覽なさい。波は生きてゐます。生きた波の手の跡に、波の氣分の顯れてゐないのはたゞの一筆だつてありません。彼は好んで砂をしゞらに織ります、松皮模様を描きます、鰐皮を作ります。朽木型、鉋をかけた玉目形。頗る意氣な綾や縞も彼の手作りです。大人の足跡、子供の足跡、轍の跡、馬の足跡。大きな梅花模様は犬が行く〳〵描いたのです。不具な楓の三本趾、鳥にしては大胯なのは烏に違ひない。ひよいひよい〳〵とやゝしばらく續いて、何かに驚いてぱつと飛立つたげであります。小さな〳〵模様の小刻みに右につゞいて左に折れ、また飜つてもとへ戻つて居るのは、千鳥か何ぞの心の曲折を語つてゐます。蟹の足跡があります。貝のあるいた跡があります。ある時、小さな〳〵刷毛で、ぱつぱと描いたやうな

センセン ほそし
纖纖 ちいさし しなやか

ヲヲ 掉 ふるう 尾

柏谷
東京府北多摩郡千歳村の大字作者の居住地

伊香保
群馬縣群馬郡伊香保町

纖い〳〵半月形を、これは何だらう、一體何が描いたのだらうと、よく見て居ると、龍の鬚に似た小さな草がそ知らぬ顏して、私ぢやあありません。と纖い首を掉つてゐました。

九十九里に往つた最初は七月といつてもしけがちで、此の大きな海を前に控へながら、毎日豆腐や、柏谷から持參の甘藍・豌豆、伊香保の干蕨の類ばかり食つてゐる日が續きました。その內二週間も經つと、七月も半ばになつて、鰺の地曳網が始りました。私共の歸る頃は鰺も大きく、味も大分よくなつてゐました。朝暗い中から拍子木が鳴ります。それは地曳の始る知らせです。私が浴衣一枚で海浴に往く頃は大抵もう曳き始めてゐました。よく凪いだ朝などは、地曳の組が、幾組も〳〵南に北に並んでゐます。霧の中に小さく見える組、もう眼に入らぬ遙かな〳〵組

もあります。なる程九十九里は大きな濱です。

腰と踵に力を入れて、急がず休まず永劫につゞくかのやうにじわじわ曳くのも、見てゐて力が入るものですが、網の目標の浮樽が見えて來てからの活氣はまた見物であります。小一町も離れて曳いてゐた南北二列の曳子が、追々近寄つて來たかと思ふと、一方の列が網を抱へながら、えつさ〳〵と他の一列の方へ駈寄ります。鉢巻の赤裸男がざんぶと海に飛込んで網元へ廻ります。棒手振が寄つて來ます。やつさ籠が幾つも〳〵並べられます。波打際では、其方曳け、此方しぼれと、網主が罵りわめいてゐます。私共も砂の上から立上つて、そろ〳〵波打際へ向ひます。もう網は盡きて、繩網が見えて來ました。其の或ものは向鉢巻、腰膚脱いだい〻加減な婆さん、かみさん、娘までが、ざぶざ

ぶ海に飛込んでいつて、件の繩網を攫んで、一抑一揚、歌で拍子を取りながら引張ります。名物の地曳歌はこれです。中でも年配の女が金切聲で音頭を取ります。皆がつゞいて囃します。彼一句此一句、歌つては曳き、曳いては歌ふ。抑へて揚げて、かゞんで、伸びて、右の片足をひよいと上げて、拍子も調子も面白く、網は段々上つて來る。

地引網引

一様な節の間々に「何とか何とかやあい。」と一齊に囃す時の面白さ。もう網が見えて來ました。網の繼目を全速力で解く。海に潛つて網の嚢をしぼる。眞裸の網主が咽喉も裂けよとわめく。一切の男女はぐるりと網に取りつき、「何とか何する、何とかなせい、何とか何とかやあい。」を矢張歌ひつゞけながら、網を手繰つては撥ね、しぼつては撥ね、段々嚢の底へ魚を寄せて行きます。子供が攤網を持つてたかります。もう網の中は、さつきから鰺や鯖の青光り、白光りが、ばた〳〵ばた〳〵、ごつたがへしてゐます。鰺の千五六百ははいるやつさ籠が持つて來られて、一杯になると、向鉢卷、雙肌脱ぎの女たちが二人で籠の緣を攫んで、「やつさやつさ」で濱へ持つて行きます。どうと置くこともあり、ひつくりかへすこともあります。いやもう盛なことです。

キラウエア　ハワイ島ヒロの西南三十哩にある火山
Kilauea
上原敬二　東京帝國大學教授　林學博士
ヒロ　Hilo
ハワイ　Hawaii
ホノルル　Honolulu

地曳通ひは私共の日課でした。私はかく自ら嘲りました。

地曳すればわれも鷗と飛んで來つ、
魚獲んとして去りがてにする。

拍子木が鳴るといそ〳〵飛んで濱に行き、獲物を手に入れるまではうろついて立去らぬ私は、魚欲しさうに地曳網の中を往つたり來たりするあの鷗や、みさごや、かいつぶりさんたちに似寄つたものでした。（新春）

一八　キラウエア火山に登る

上原敬二

ヒロはハワイ群島に於けるホノルルに亞ぐ日本人發展の土地であつて、人口僅かに四萬に過ぎないが、其の過半は日本人であ

撓（トウ）たわむ

椰子 Coco　パヽイヤ Papaya 蕃果樹　マンゴー Mango 檬果　バナヽ Banana 甘蕉

る。さうしてキラウエア火山は此の町より約三十哩の行程にある。火山は日が沒してから見物に往くことになつてゐるので、時間を見計らひ、此の近處の甘蕉畑などを視察して時を過し、一時頃に自動車で山頂へと向つた。登山道路は非常によく出來て居て、里近くでは椰子・パヽイヤ・マンゴウ・バナヽ等の植物が枝も撓むばかりに實り、山頂に近く進むに隨ひ、漸く熱帶林の林相が表れて來る。名も知れぬ羊齒の高大なものが道も狹しと茂り合ひ、美しい鳥は此の茂みの間に奇異な聲を出して飛びまはつてゐる。自動車は三十五哩の速力で走つたが、途中で雨が降りだして來た。初め二三度は降りて森林の寫眞をとつたが、後には篠を束ねたやうな驟雨に閉口して、ひたすら山頂へと急いだ。寒さも漸く加つて來て、外套の襟から沁みこむ雨の滴に

マウイ Maui ハワイ島の北隣の島　キャンプ Camp 幕營　ジャガ博士 Dr. T. A. Jagger.

頸を縮めて車を急がせた。三時半、頂上の火山ホテルの前に自動車は停つた。まだ時間は早し、夕暮まで二三時間はあるので、明るい内に近所の森や火口や溫泉を見て廻らうと、まづホテルに入り、其處の硫黄泉の浴室や療養室を見せて貰つた。ホテルのボーイに日本人が二人居たのは何となく懷かしかつた。此の火山はマウイ島の火山と共にハワイ國立公園になつて居るが、アメリカ本國の國立公園とは趣を異にし、殆ど公園の設備はしてないと謂つて宜しい。ホテル・溫泉浴場・キャンプ・郵便局位なもので、唯此の大自然の火口そのものが呼物となつてゐる。山頂には火山學の研究に名あるジャガ博士が住宅を構へて、觀測室に立てこもり、助手二三人と共にハワイ島の火山研究に沒頭して居る。吾輩もホノルヽの農事試驗場から紹介狀を貰つ

火山彈（ボム）
熔岩の粉細せる大きなる彈丸となるもの

スケッチ Sketch

シリカ 硅酸 Silica

てゐたので、一時間ばかり對談し、火山爆發のこと、熔岩流さてはは公園としての施設のことなど、色々聞いて大に得る所があつた。赭顔に笑を湛へ、偉大な軀を搖りながら快活に語る所、この火山の恐しい現象を研究する人とも思はれなかつた。博士と別れ、再び自動車を飛ばして、七時半頃火口に着いた。

雨は益〻劇しく、風はさながら横なぐり、まるで颶風の様であつた。暫く日が暮れるまで、火山彈や熔岩などを拾ひながら、スケッチをしたり、寫眞をとつたりした。運動でもしないと寒くて仕方がないので、火口の周圍を見て歩いた。そのあたり一帶ぼくぼくした熔岩が流れ出て、鉛が固まつた樣な、色々な形が出來て居る。殊に珍しいのは火山毛と云ふ奇怪な毛髮狀のもので、これは熔けた岩の内のシリカだけが、分離して絲の樣に細くなつた

アト 迹 蹟 ニ同じ

ペレの毛 Pele's Hair

ものて、熔岩の運動の劇しいために岩の隙間々々に苔の樣に挿まつたのである。俗に「ペレの毛」と呼ぶ。傳說によると、この島に昔ペレと云ふ妙齡の少女が居たが、一日其の兄を見失つたので搜しに出かけたが、どうしても見當らない。その内母親が心配して娘を搜しに出かけて來た。これを見たペレはいきなり其處にあつた孔に隱れ、面を見られるのがつらさに、少女の一念、急に口から火と水とを吹出して迹を晦ました。其の水は太平洋となり、火はキラウエアに燃えて天をこがしてゐる。この少女の髮の毛が火山毛に化したのだと云ふ。兎に角學術上貴重な標本である。

雨は又一しきり烈しくなつた。足許の熔岩層の間からも水蒸氣を吹出し、一面濛々として萬象姿を消し去るかと思はれる。

ウクレ、ハワイ土人の樂器

火山見物の人はホテルから次第々々に集つて來た。今や夜の幕の靜かに垂れて行くのを待つのみとなつた。ウクレ、を手にしてこゝかしこに土人の一團も加り、火を觀ながら雨にもめげず泣くが如く咽ぶが如く、高く低く緩く急に樂の音につれて歌ひ合ふ　やるせない異國情緒があたりを支配する。

黃昏は次第に迫つて來る。火口面にはちら〳〵と火の線が赤く見える樣になつた。一しきり吹いて來た風に雲が動いたかと見る間に、日はとつぷりと暮れた。今までは氣にもしなかつたが、何處ともなく恐しい大きな響が傳はつて來て、靜寂な大地も爲に搖ぐかと思はれた。俯して火口を覗くと、驚くべし眞に煮えかへる火の湖である。火口の周圍は十二三町もあらうか、立昇る水蒸氣でよくは見えないが、其の中に四五十間も下つて

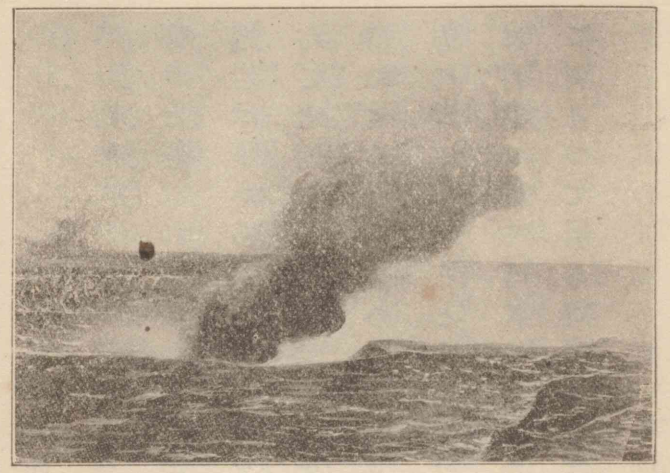
沸り

逆ほとばしる

火の荒海　噴火口の中にある赤熱せる熔岩の池直徑千呎位土人はハレマウマウ(Halemaumau)と呼ぶ不滅火の家(The House of Everlasting Fire)の意といふ

熔岩は眞紅の焰を揚げてぐら〳〵と沸り立つて居る。其の音の物凄いこと、時に遠雷の如く、時に瀑布の轟くが如く、暴風が大木の梢を吹きをる音かと思へば、忽ちにして巖に寄返す怒濤の唸りと想はれるばかり。中は一面の火の荒海で、處々固まつた熔岩は下から突きあげる火泉のために破れて、丁度波が巖を嚙んで水煙を揚げるやう。火柱は數十間の高さに迸る。それが落ちて來て、熔岩の上に散り擴り、阿修羅の如く荒狂ふ火花は八方に飛ぶ。すると火の波は再び勢を增して大洋の怒濤が岸邊に打寄せたやうにうねりを立てゝ寄せ流す。これが島のやうに突立つて居る熔岩塊に當ると、其處に大きな熱火の大爭鬪が起る。其の波動が火口全面に及ぶと、さしもに廣い火口一圓は更に眞紅の色を增し、大地を搖がして、天を焦す火柱は龍卷のや

うに荒登る。此の世ながらの焦熱地獄である。今こそはこんな低い所で渦卷いて居るが、數年前はこれが火口にのし上つて來て、靜かに火口壁を溢れて熔岩流は地上に漲り出で、足許まで流れ寄つた。その内又靜かに火口を下つて流れ、絶えず上下の運動をして居たのだと云ふ。凄絶壯絶、實に言語道斷である。蒸氣は濛々として立登り、時々亞硫酸瓦斯を吹きまぜて喉を刺戟する。高く空を仰げば炎々として天をも焦さん



キラウエヤ火山

ず勢。遠く洋上を走る南米航路の汽船からも、大洋の彼方に空の燃えて居るのが見えると云ふ。

見物人の足許にどろ〳〵の熔岩流が押寄せて來た時、これを掬ひ取つて型に入れると、色々な形の岩が出來る。

しばらく奇景に見惚れて居る。際限がないので、殘り惜しいが別を告げて火山道を戻り、乘りすてた自動車で雨を衝いてもと來た道へと引返す。顧みれば眞紅の雲高く上空を蔽うて彼方なる眠れる舊火口を照す。我々を載せてゐる地殼は、この恐しい火團の燃殘りであるかと考へると、星雲時代の昔を目のあたり見る心地がする。

自動車には横なぐりの雨が遠慮もなく幌なき窓から吹入つて、夜の寒さは一入身に沁みる。降り坂は全速力で戻つて來たが、

それでもホテルに着いたのは十時過ぎであつた。づぶ濡れの洋服を乾かして蘇生したやうな氣持になりながら、あの凄じい光景を思ひ浮べた。（わたり鳥の記）

一九　椰子の實

島崎藤村
名は春樹
詩人
小説家
明治九年信濃國
木曾生

島崎藤村

名も知らぬ遠き島より、
流れ寄る椰子の實一つ。

ふるさとの岸を離れて、
なれはそも浪にいく月。

もとの樹は生ひや茂れる、
枝はなほ蔭をやなせる。

われもまた渚をまくら、
ひとり身の浮寢の旅ぞ。

實をとりて胸にあつれば、
あらたなり、流離の憂。

海の日の沈むと見れば、
たぎり落つ異郷の涙。

思ひやる八重の潮路
いづれの日にか國に歸らん。（藤村詩集）

二〇　ポ　チ

二葉亭四迷
本名は長谷川辰之助
文學者
新聞記者
江戸生
明治四十二年歿
年四十八

私は元來動物ずきで、別して犬は大好きだから、近所の犬は大抵馴染だ。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寢られないのかえ。」

と、母が寢反りを打つてこちらを向いた。私は此の返答は差措いて、

「あれは白ぢやないねえ、阿母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つてなあに。」

「棄犬つて……誰かゞ棄てゝいつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄てゝいつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が犬を棄てゝいつたと、私は二三度反復して見たが分らない。

「どうして棄てゝいつたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない。何處までも相手になつて、

其の意味を説明してくれて、「もう晩いから默つてお寐」と優しく言つて、又あちらを向いてしまつた。

私も亦夜着を被つた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の鼾が又蒼蠅く耳に附く。寐られぬ儘に、私は夜着の中で、聽いた母の説明を繰返し〳〵味はつて見た。

長谷川二葉亭

まづどこかの飼犬が緣の下で兒を生んだとする。ちひさなむく〳〵したのが重なり合つて首を擡げて、みい〳〵と乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、其の側へどさりと横になり、片端から抱へ込んでべろ〳〵甜めると、小さいから舌の先で他愛もなくころ〳〵と轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よち〳〵と這寄つて、ぽつちりと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、狼狽へてちうと吸附いて、小さな兩手で揉立て揉立て吸出すと、甘い溫かな乳汁がどく〳〵と出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。と腋の下からまだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んで來る。奪られまいとして、產毛の生えた腕を突張り、大騒をやつてみるが、到頭奪られて了ひ、又其處らを尋ねて、他の乳首に吸附く。其の中にお腹もよくなり、親の肌で身體も溫まつて融けさうな好い心持になり、ついうと〳〵となると、含んだ乳首が脫けさうになる。夢心地にも狼狽へて又吸附いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なくうと〳〵となつて、乳首が遂に口を

脫ける。脫けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。

其の時忽ち暗闇から、もぢや〳〵と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つてゐる處を無手と引掴み宙に吊す。驚いて目をぱつちり明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つて藻搔く中に、頭から何かで包まれたと見えて眞暗になる。窮屈で息氣が詰りさうだから、出ようとするが出られない。暫く藻搔いて居る中に、ふと足搔が自由になる。と、領元を抓まれて、高い〳〵處からどさりと落された。うろうろとして其處らを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、おそろしく寒くなる。身慄ひ一つして、くん〳〵と親

を呼んで見るが何處からも出て來ない。途方に暮れてよちよちと這出し、雨の夜中を唯ひとり溫かな親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、また何處へか彷徨つて行つたやうだつたが、其が何時か又戻つて來て、何處をどうもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

「阿母さん〳〵、門の中へ入つて來たやうだよ。」

と、私が何だか居たゝまらないやうな氣になつて、又母に言掛けると、母は氣の無さゝうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつて……あらあんなに啼いてる……。」

履（リ）ふむはく　歴　行　踐

と折柄絶入るやうに啼入る犬の聲に、私は我知らずむつくり起上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見よう、よう」。

「本當に仕様がない兒だね」。

と、口小言を言ひ〳〵母も澁々起きて、雪洞（ぼんぼり）を點けて立上つたから、私も其の後について、玄關、と云つてもつい次の間だが玄關へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、からりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちら〳〵と靡く。其の時小さな鞠の樣なものがつと軒下を飛退いた樣だつたが、軈て雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の暗黑を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照し出した處を見ると、つい其

掉（ふる）　瞻（セン）（みる　あふぎみる）　視　仰　望

處に生後一箇月も經たぬ、むく〳〵太つた赤ちやけた狗兒（いぬころ）が、小指程の尻尾をちぎれさうに掉立てゝ、此方を瞻上げてゐる。體（なり）は私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雫を滴（たら）し、ぽつちりと兩つの眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おや〳〵まあかはいらしい」。

と母もつい言つてしまつた。況や私は犬好だ。じつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつちよつと呼んで見た。

と、左程恐れた樣子もなく、ちよこ〳〵と側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐい〳〵

推上げるやうにして、べろ〳〵と舐廻し、手をくれる積りなのか、頻に圓い前足を擧げてばた〳〵やつてゐたが、果はやんわりと痛まぬ程に小指を咬む。

私はかはいくてかはいくてたまらない。母の顏を瞻上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん何か遣つて。」

「遣るも好いけど、居附いてしまふと仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來てくれた。早速履脫へ引入れて之をあてがふと、狗兒は一寸香を嗅いで、すぐ甘さうに先づぴちや〳〵と舐出したが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時時くしん〳〵と小さな嚏をする。忽ち舐盡して、今度は飯に掛

つた。他に爭ふ兄弟も無いのに、頻に小言を言ひながらがつがつと食べ出したが、飯は未だ食べ慣れぬかして、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事では中々取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の隙に私は母と談判を始めて、今夜一晩泊めてやつてと雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、もう斯うなつては仕方がない。「阿父さんに叱られるけれど。」と言ひながら、詰り棧俵法師を搜して來て、履脫の隅に敷いてやつた。それは好かつたが、其の晩一晩啼通されて、私はちつとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌な父は泊めた其の夜を啼明されて了ふとうんざりしてしまつて、翌くる日は是非逐出すと言出したから、私は小犬を抱い

て逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、併しそれも一時の事で、その中に小犬も獨寢に慣れて夜も啼かなくなる。と、逐出す筈のものに、いつしかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと父までが一緒に搜すやうになつてしまつた。

父がかうなつたのも無論ポチを愛したからではない。唯私に牽かされたのだ。私とてもポチを手放し得なかつたのは、强ちポチを愛したからではない。愛す、愛さんはさておいて、私は唯かはいさうだつたのだ。親の乳房に縋つて居る所を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された犬の兒の運命が子供心にも果敢なく情ないやうに思はれて手放すに忍びなかつたのだ。

この忍びぬ心とその忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心の搦み合つた所にポチは旨く引懸つて、辛くも棒・石ころの危ない浮世に彷徨ふ憂目を免れた。で、どうせそれは蜘蛛の巣だらけではあつたらうけれど、ともかくも雨露を凌ぐに足る緣の下の菰の中で旨くはなくとも朝夕二度の汁懸飯に事缺かず、まづ無事にのんびりと育つた。

育つにつれて、まる〳〵と太つてかはいらしかつたのが、身長に幅をとられて、ひよろ長くなり、而もひどくとぎすになつて、一寸狐のやうな犬になつてしまつた。前脚を突張つて、尻をもつたてゝ、弓のやうに反つて伸をしながら大きな口をあんぐりあいて欠をする所などは、誰が眼にも餘り見つともよくなかつたから、父は始終「いやな犬だ。」「いやな犬だ。」と言つて私をいやがらせた

が、私はそんなことで愛をさますやうな心は聊かも無い。いやな犬だと言はれるほどなほかはいゝ。

「ねえ阿母さん、こんな犬は何處へ行つたつて、かはいがられやしないねえ。だから内でかはいがつてやるんだねえ」。

といつも苦笑する母を無理に味方にして、揶揄ふ父と爭つた。犬好は犬が知る。私のこの心はポチにも自然と通じてゐたらしい。その證據には犬嫌の父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振向きもせんで往つてしまふことがある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて眼を輝かして飛んで來る。さうして母の手の中にそれらしい物があれば兎のやうに跳ねて喜ぶ。がしかし唯それだけの事で、その時のポチはやつぱり犬に違ひない。

揉むもむ　たわむ

内田魯庵
名は貫
文學者
明治元年東京生

その矢張犬に違ひないポチが私に對ふと、犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか。どつちだかそれは分らないが、とにかく互の情愛に人畜の差別を撥無して、渾然として一如となるのである。（平凡）

二　二葉亭の文章

内田魯庵

二葉亭は始終文章を氣にしてゐた。文人が文章に氣を揉むのは當然のやうであるが、偶像破壞時代の文人は過去の一切の文章からは全く離れて、自由でありさうなものである。極端に言へば、思想さへ思ふやうに表現する事が出來るなら形式や修辭はどうでもよかりさうに思はれる。二葉亭も文章論としては

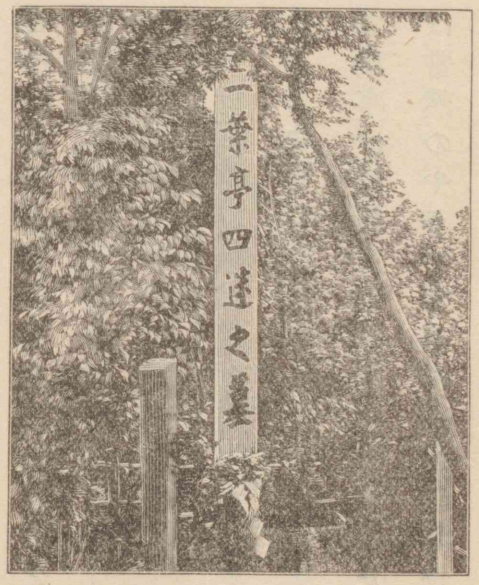
のぞきなくする。
差別なき様を云ふ
相異らざる了
如
眞實相の理

詮索（センサク）　尋ねさがす

魏叔子
魏叔子文集二十二卷
清の魏禧の文集
議論文が得意

壯悔堂
壯悔堂全集十七卷
清の侯方域の詩文集
傳記がよい

隨分思切つた放膽な議論もしたが、いざ自分が筆を執る段となると、假名遣から豆爾乎波（テニヲハ）、漢字の正訛、熟語の適否、若い文人が好い加減に創作した出鱈目の造語から句讀の末に至るまで、一々詮索して精究する、實に小心翼々（とくのうえをさとし）たるものであつた。あの時代の人は大抵漢文の素養があつたから文章の稽古には可なり苦しんでゐた。中には文學卽ち文章といふ誤つた考を吹込まれてゐるものも多くあつた。當時の文章教育といふのは古文の摸倣であつて、山陽が項羽本紀を何百



二葉亭墓標

鴨長明
鎌倉初期の隱逸で文學者
方丈記の著者

馬琴
瀧澤解の號
江戸後期の文學者
八犬傳等の著者
嘉永元年（一八五〇）歿
年八十二

京傳
岩瀨醒の號
德川後期の戲作者
文化十三年（一八一六）歿
年五十六

三馬
式亭三馬
本名菊池泰助
德川後期の戲作者
浮世浮呂浮世床の著者
文政五年（一八二二）歿
年四十八

雕（テウ）ほる、彫に通ず

遍反復して盡くそれを諳記したといふやうなことが根深く注ぎ込まれてゐた。二葉亭も根が漢學育ちで魏叔子や壯悔堂を毎日繰返し、同じ心持で清少納言や鴨長明を讀み、馬琴や京傳・三馬の近世文學まで究め、課題の文章を練習するつもりで近松や馬琴の眞似をしたり、或は俗文を漢譯したり、漢文を俗譯したりした。從つて文章を氣にすることは甚だしかつた。一面には從來の文章型を根本から破壞した改革家でありながら、一面に於ては亦極めて神經的な新しい雕蟲の技術家であつた。

自分は小說家で無いとか文人になれないとか云つたのには、種種の意味があつたらうが、自ら文章の才が無いとあきらめたのも亦有力なる理由の一つであつた。二葉亭の作を讀んで文才を疑ふ者は恐らく無からうと思ふが、二葉亭自身は常に自己の

ツルゲーネフ　ロシヤの小說家　二葉亭はあひびきめぐりあひなどを譯したTurgenieff（1818-1883）

ドストエフスキー　ロシヤの小說家　Dostoyevsky（1821-1881）

露伴　幸田成行　文學者　慶應三年（一八六七）江戸生

紅葉　尾崎德太郎　小說家　江戸生　明治三十六年歿　年三十七

文才を危んで、神經的に文章を氣に病んでゐた。文章上の理想が餘り高過ぎたといふよりも、昔の文章家氣質が失せなかつたのであらう。ツルゲーネフを愛讀したのも文章のためであつて、晩年餘り感服しなくなつてからも、なほその精妙な修辭には、傾倒してゐた。ドストエフスキーの「罪と罰」は露國の最大文學であると確認しつゝも、なほその文章は、から下手で、まるで成つてゐないと云つてゐた。そんな風で、文學上の批判がともすれば文章の好惡に囚はれてゐた。例へば當時の文學者についても、露伴を第一人者であると推しながらも、座右に置いたのは紅葉全集であつた。近松でも西鶴でも內的概念よりはより多く微妙（デリケート）な文章味を鑑賞して、此の言葉の綾がおもしろいとか、此の引掛けが巧だとかいふやうなことを能く話した。又紅葉の人

近松　近松門左衞門　本名杉森信盛　德川前期の戲曲作家　享保九年（一七二四）歿　年七十二

西鶴　井原西鶴　德川前期の小說家　元祿六年（一六九三）歿　年五十二

生觀照や性格描寫を凡常淺薄（なみなみであさはかなり）と貶（おとす、しりぞく）しながらも、其の文章を古今に匹儔（たぐい）なき名文であると激賞して常に反復細讀してゐた。最も驚くべきは「新聲」とか何々文壇とかいふやうな青年寄書雜誌をすらわざ〳〵購讀して、中學を卒業したかしない位の無名の青年の文章まで一々批點を加へたり評語を施したりして、備さに味はつてゐたことである。丁度植物學者が路傍の雜草にまで興味を持つて精しく研究すると同一の態度であつた。此の點では私は全く反對であつた。私は性來の惡文であるためであらうが、一體文章を重んじない方で、曾て紅葉から文壇の野獸視されて、君の文章論は狼の遠吠だと罵られた事があるからゐである。が、自分のやうな鈍感な者では到底味はふ事の出來ない文章上の微妙な句を二葉亭から聞いては、流石に發明し

推敲（スイコウ）　竄（ザン）

た事もあつたし、洗煉推敲肉の瘦せるまでも反復改竄して曾て飽くことを知らなかつたのを見ては、衷心感服せずにはゐられなかつた。特に歿後その遺文を整理して偶然最初の原稿を檢するに及んで、世間に發表した作品と比べて、文章の調子や匂や味がまるで別人のやうに違つてゐるのを發見し、二葉亭の五分も隙が無い、一字の增減をも許さない完璧の文章は、全く千鍛萬錬の結果に外ならぬことを今更ながら痛感したのであつた。

（思ひ出す人々）

詩文の文句を考へ直す　文字づかひか、文句のつづりかへ

新井白石
名は君美
國漢學に深く外國の事情にも通じて居た
德川家宣に用ひられて政治に參與した
享保十年（一三八五）卒
年六十九

三　おもひで

新井白石

我が幼きころに、上野物語といふ草紙ありけり。これは寛永寺の花見に人のむれ來ることどもしるしゝなり。我が三歳なりし春のころにやあるべき、火燵に足をさして、はらばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙を求めてすき寫しけるを、母にておはせし人の見給ひ、十が中一二は、まことの文字もあるを、我が父に見せ參らせしを、父の友なる人の來り見しより、人々も聞傳へてその寫せるものどもを取傳ふる事になりたり。我が十六七歳の時上總國に往きしに、かしこにて、その寫せるものを見る事を得たりき。又其の頃屏風に我が名を題せしに、二字はその體をなしたるものゝ後までありしが、火に燒けうせたりければ、今はその節のものは我がもとには殘らず。此の後は常の戯に、筆取りて物書く事のみ教へければ、おのづから日々に文字を見知りたれど物讀む師などすべき人無かりしかば、只往來物の類などを讀

寛永寺
上野の東叡山寛永寺

往來物
庭訓往來消息往來などの類

畢（ヒツ）　をはり　をこと　心と　全意

戸部　土屋民部少輔利直　上總國久留里藩主　白石の父の主君

富田　始め小右衛門後に覺信と云つた人

太平記　四十卷　後醍醐後村上兩帝の時代の事を記した軍記

上松　忠兵衛と云つた人　連歌や書に巧であつた

みならふのみなりき。戸部の家人に富田とて生國は加賀の人と聞えしが、太平記の評判と云ふ書を傳へて、其の事を講ずるあり。夜々に我が父など寄り合ひつゝ其の事を講ぜしめらる。我が四五歳の時に、常にその座に侍りてこれを聽くに、夜いたく更けぬれど、終に座を去りし事もなく、講畢りぬれば、其の義を請ひ問ふ事などありしを、人々奇特の事なりといひき。

六歳の夏の頃、上松といひし人の、少しく文字などありしが七言絶句の詩一首をしへて、其の意をとき聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも講じ聞かせたりき。

「此の兒文才あり、いかにも師を選びて學ばせしめらるべし。」など、彼の人も云ひしかど、かたくなゝる昔人たちのいひしは、「昔より

傳へし事あり。利根・氣根・黄金の三こんなくしては、學匠にはなりがたしと云ふなり。『此の兒利根こそ生れつきたらめ、なほいとけなくしてその氣根のことも測りかたく、家富めりとも見えねば、黄金の事心得られず。』などいひあへりしに、我が父も「戸部の御いつくしみによりて、常に傍を離れ參らせず、學に入れ師に從はしめん事も叶ふべからず。されど幼きより物書く事をば戸部も人々に語り誇らせ給ひし

新井白石

上總國
久留里藩
木更津の東南六里

事なれば、せめて物をば書き習はしめたくこそ侍れ」とて、我が八歳の秋、戸部の上總國に往き給ひし後にて、手習ふ事を教へしめらる。其の冬の十二月半ば戸部歸り參り給ひしかば、つねに傍にさぶらふ事もとの如し。侍うう居る

明けの年の秋また國に往き給ひし後にて、課を立てられて、日の中には行草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書出すべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば日短くなりて、課はまだ滿たざるに、日暮れんとすること度々にて、西向なる竹緣のある上に机を持ちいでて、書きをへぬる事もありき。また夜に入りて手習ふに睡の催して堪へがたきに、我に附けられしものと、竊かに圖りて、水二桶づつかの竹緣に汲置かせて、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎすてゝ、まづ一桶の水をかゝりて、衣うち着て習ふに、始め

庭訓往來
一卷
僧玄慧著
一年十二月の贈答の手紙の手本を示したもの

冷やかなるに目覺むる心地すれど、しばし經ぬれば、身溫かになりて、また〳〵睡くなりぬれば、又水を懸る事前の如くす。二たび水を懸りぬる程には、大やうは課をも滿てたりき。これは九歳の秋冬の間の事なり。

かゝりし程に、此の頃よりは我が父の人に贈り給ふ文をば形の如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日のうちに淨寫して參らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、冊になして戸部に見せ參らす。賞め候ふこと大方ならず。十三の時よりは戸部の人と贈答し給ふ程の文ども大方は我に命ぜられき。

又十一歳の時に我が父の友に關と云ひし人の子どもは、太刀打の技に勝れて人に教ふる事ありしを、我にも此の技教へられん

御手書被下辱拜見仕候如仰雨濕之節彌御堅固被成御座珍重奉存候沙而先日御柱臨爲御禮昨日參拜之儀被仰下重疊過當之至辱次第奉存候猶其内以拜謝可申上候

以上

四月廿五日　新井筑後守

豆州樣

十六になりし者神戸といふ人の二男であつた

新井白石筆蹟（名家手簡）

ことを望みしに、「わぬしいまだ幼し、これらのわざ學ばんことなほ早かり。」と云ふ。「さこそ侍るべけれど、太刀つかふこと少しも心得ざらんには、刀脇差腰にせんこと、誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふ所誠に然なり。」とて、一つの技を傳へて習はしめたり。かゝりし程に、其の年十六になりし者の、我と藝を試みんと云ひしかば、木刀を取りて三度搭ひて三度まで

若侍　長谷川といふもの

翁問答　二卷　中江藤樹の著　歴史文學其の他につき老翁と學者と問答した體に書集めたもの

京の人　江馬益庵

小學　六卷　宋の朱熹撰　内篇外篇に分け儒教の道を平易に説き且古人の言行を錄した修身書

程子　宋の程明道

勝つことを得たりしぞ、人々もまた興に入りて笑ひたりける。その後は、つねにかゝる武藝の事共を好みて手習ふ事など心にも染めずありしかど、物讀む事をば好みければ、常に我が國の物語・草紙等の類をば見ずといふものもなかりき。

十七歳の時に至りて、同じやうに召使はれし若侍の侍に往きしに、案の上に書あるを見れば、翁問答と題せしものなり。いかなる事をや記しぬらんと思ひて、借ることを得て家に携へ歸りて見けるにこそ、始めて聖人の道といふものある事をば知りけれ。これより道に志切なりけれど、師とすべき人もあらず。京の人にて醫を業とし、少しく學問あるが、戸部の許に日々來れるあり。此の人に向ひて志の程を語りしに、小學の題辭を講じ聽かせられたり。その後又程子の四箴をも講じ聽かせられしより、やが

て小學の書を日夜に誦し習ひて、業已に畢りぬれば四書を誦し習ひ、その後また五經をも誦し習ひたれど、これらは皆々句讀を授けし師あるにもあらず、自ら韻會・字彙等の書によりて誦し習ひければ、後に思ふに、ひがごとのみぞ多かりける。（折たく柴の記）

四書
大學
中庸
論語
孟子
五經
詩經
書經
易經
禮記
春秋

字彙
十四卷
明の梅膺祚撰
漢字の書引の字書

二三　同じ人間

渡邊崋山

私十二歳の時、日本橋通を通行仕候節、忘れも仕らず備前侯の御先供に當り、打擲を受け申候。當時子供ながらも大息して、備前侯は御歳大抵私と同年位なるに、大衆を率ゐて天下の大道を御横行成され、私は同じ人間にて、天分とは申しながら、その御先供に當りて打たるゝ事發憤に堪へず、今より何なりと志し候はゞ、如何なる儀にても出來申すべしと存じ、その頃高橋文平とて御祐筆相勤め申候者、私子供には候へども、日頃合口にて候間、此の者に相談に及び、爽鳩先生の門に入り、儒者に相成申すべしと決心仕候。さりながら私親父二十年來の持病にて、一日も看病・按摩を缺き難く候間、朝夕退食の間、之を奉公同樣に相心得、母の手助け仕候。その上兄弟皆幼少にて、七人程もこれあり、唯母の手一つにて老祖・病父・私共までその日を送り候事故、何分些かの餘裕も之なく候。貧窮最も甚だしく、筆紙に盡し候所には之なく候。之に依つて弟共は寺に奉公に出し、又は出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣はし申候。

私十四歳許の冬幼少の弟を板橋迄生別れに送り參り候時、

爽鳩先生
鷹見氏
田原藩の儒臣

板橋
武藏國北豐島郡
板橋町
舊江戸四宿の一

熊谷宿
武藏國大里郡熊谷町

ちら〳〵降來る雪の中を八九歳の弟が見も知らぬ荒男に連れられ、後を振向き〳〵別れ候事、今に目前に髣髴仕候。右弟は定意と申し、後熊谷宿にて客死仕候。雷之助と申すは始七歳の時青松寺と申す寺へ奉公に遣はし、後に御旗本屋敷へ養子に遣はし候。是以て食物足らず、困窮の餘りの事に候へば、養子とは申しながら丸裸にて、申さば親不知の樣にて遣はし申候仕合故、何事に就きても先方里方を侮り候を心外に存じ、終に京都に出奔仕候。その後主人惜しき人物に存ぜられ、引戻され候處、是又數年辛苦仕候爲、彼の地にて病氣に罷成、歸府後、間も無く終に相果て申候。右の次第故、妹兩人も、一人は遠方へ遣はし、一人は貧家へ罷越し、貧死仕候。これかれを考へ候へば、至貧至困無策無術の上に

親父大病に相罹り候爲、斯くは兄弟過半非業同樣の病死仕候次第に御座候。これにて當時困難至極の儀御察し下さるべく候。

私母近來迄夜中寢ね候に、蒲團と申すもの、夜具と申すもの、疊・建具の外大抵質物に置盡し、猶親類共にも借盡し候へば僅か南鐐一片の儀にて、母方身内に當り候山伏の本所一つ目に住居候方へ、母事唯今存生仕居候助右衞門と申す弟

渡邊崋山

引きかけ候を見及び申さず、破れ疊の上にごろ寢仕り、冬は火燵にふせり申候。私親父大病故、高料の藥種・藥禮、日食の麵類等に事缺

白芝山
白川芝山
名は景皓

金陵
金子氏
江戸の畫人
文化十四年（一八一七）歿

を背負ひ、雪中を冒して罷越し、夜に入り候て歸宅仕候事之あり候。その節私洗足の湯を沸し候とて衣服をこがし、大いに叱られ候儀今に覺え罷在候。之に依つて猶又高橋文平に相談仕候處、とても學問など致し、儒者に相成候とて、金のとれ候儀は之なく、何よりも貧を救ふ道第一なりと申すにより、爽鳩先生を賴み、芝の白芝山と申す畫工へ入門仕候。此の時私十六歳に御座候。

然る處貧人にて附届（フカイ）行届かずとて僅か二年にて、師家より斷りを受け申候。私も此の時は如何仕るべきかと泣沈み候處、親父申候は、金陵事は大森勇三郎樣の御家來に付、その旨申したらば憐み申すべしと申すにより、弟子と相成候處、金陵殊の外相憐み、少々は出來候樣に相成候。さりながら、

文晁
谷氏
江戸の畫人
天保十二年（一八四一）歿
年七十八

一齋
佐藤氏
德川幕府の儒官
安政六年（一八五九）歿
年八十八

半紙を調へ候手段之なく候まゝ、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢を取り、日本橋二丁目遠江屋、麹町天神たこやにて憐を乞ひ、多分に相成候へば、右を以て紙筆を調へ申候。斯く仕候間にも學問は仕度存候へども、何分閑暇之なく候へば、冬に相成候へば朝七つ時に起出で、飯を焚き、その焚火にて讀書仕候。右は私を憐み畫道に於て種々取立てくれ候文晁が毎曉起出で畫を認め候咄を承りて、發憤致候次第に御座候。右畫事少々宛内職と相成、稽古も出來候樣相成候も、全く前爽鳩先生の恩澤に御座候。

私廿六歳の正月元日、深く感ずる所これあり、

見よや春、大地も亨す地蟲さへ。

と申す句仕候。之に依つて一齋へも申談じ學問仕度候へ

ども、何分寸暇なく候へば、夜中にても參り申すべきに付、御門制の儀然るべく御取成下され候樣依賴候處、一齋よりその趣を書取り、親父へ申遣はされ候趣之あり、即ち親父より村松六郎左衞門殿へ夜御門限の儀に就き願ひ出で候處、六郎左衞門殿より、儒者に無之ては御門制の儀仰出され難き旨御沙汰を傳へられ候に付、終に折角の志相挫け申候。熟〻存じ候は上にして君に忠、下にして親に孝、皆是學問中より出で來り候儀に有之、殊に上へ忠と申す事は無學無術にては叶ひ難し、これよりは愈以て繪事を專らとして、急にしては親の貧を助け、緩にして天下第一の畫工と相成申すべき一事に思を定め申候。

繪事にて推謀り存候に、第一の心と申すもの立ち申さず候

ては物の形整ひ、落なく見事には出來申さず候。又心ばかりやたけに存込候とて、手が心の通り動き申さず候ては、畫成り申さず候。又手ばかり自由に相成候とも胴體四肢治り申さず候ては机に向ひ、腹より溢れ候樣には出來申さず候。これに依つて總身の中、髮の先、爪の端まで皆畫に相成候樣仕事にて候。已に古人も、明窓淨几は書の合、風雨擾雜は書の乖と申候。身外のものすら此の如し。況して總身のうち猶更に御座候。今の諸侯如何にや。諸侯にして國を治めずして家中百姓に出精致せと令し候とて服從仕者可有之哉。又奉行にても奉行だけの事を盡し申さずして百姓に令し候ても猶更承知仕らず候。然らば上よりして下足輕に至る迄治安に志これなくては出來申さゞる如く

繪事も右之通りと相心得候へども治道の事は如何哉、審に辨へ申さず候。左様に御座候へば、畫事も治道も一理にして二理はこれなく、畫道を以て治道に試み申すべしとあらんには、隨分試み申すべく候。（崑山全集）

二四　茶話

薄田泣菫
名は淳介
詩人
新聞記者
明治十二年岡山縣連島町生

米國の華盛頓であつた事――或土地で名高い判事のKといふ男が、豫て顔馴染の肉屋の店先を通りかゝるとでつぶり肥つた店の主人が、いつもの愛嬌笑ひをしい〳〵

「一寸……」

と言つて呼びとめた。

判事は立止つた。肉屋の主人といふのは、いつも剽輕な世間の噂を聞かせてくれるので、大抵の場合その店先で立止つても損はしなかつた。

「お呼びとめして相濟みませんが、一寸旦那に伺ひたいと思ひやしてね。」肉屋の主人は輕く頭を下げた。「肉を盗まれたのは、法律上どんな手續をしたもんでがせうな。」

「肉を盗まれたのか、それは告訴しなくちやならん、うつちやつとくと、癖になつていかんからね。」

判事は肉の事なら、値段からビフテキの味加減まで、法律でどうにでも出來ると考へてゐるらしかつた。

「全く癖になつていけやせん。」肉屋の主人は二三度輕く頷いた。

「ところが盗んだ奴が人間ぢやないんで困つてしまひやす。」

Beefsteak　ビフテキ

「人間ぢやない。何だね、それでは。」

「狗なんでげす。」

「狗だつて。そんなら飼主から肉代を辨償させるまでの事さ。」

判事は何でもかでも法律で押通したいらしかつた。「そんな狗を飼ふなんて怪しからん事だ。」

「ところが、旦那、その狗つてえのが、お宅の斑なんでげす。」

肉屋の主人は氣の毒さうに揉手をしながら言つた。

「宅の狗か。」判事はだしぬけに途の眞中で鼻を抓まれたやうな顔をした。「それぢや仕方がない、盗まれた肉代は幾らだつたね。」

「お氣の毒さまですね、五弗でげす。」肉屋は丁寧に頭を下げた。

判事はねぢ曲げたやうな笑ひ方をしながら、懷中から五弗出して肉屋に拂つた。

それから二三日すると、肉屋の店に、件の判事からの仕拂請求書が來た。主人はけゞんさうな顔をして封を切つた。中には

一金五弗也
牛肉盗難事件鑑定料
右請求候也

と認めてあつた。肉屋の主人は舌打をして五弗仕拂つた。

（茶話）

黑板勝美
史學者
東京帝國大學教授
文學博士
明治七年長崎縣生

オリンピヤ　希臘の南部ペロポネス半島の西北部一小村
Olympia
コリント　古のペロポネスヽの首府
Corinth　半島の東北部に在る

二五　オリンピヤ

黑板勝美

古コリントの廢墟に遊んで登臨の快を恣にしたる余は、一夜の夢を淋しき客棧に結び、翌くる朝汽車に搭じてオリンピヤに向つた。ペロポネスヽの北岸碧波綠樹の間を縫つて西に走りつ

つ、車窓に凭つて眼を放てば、オリーブの森茂れるあたり、舊道の見えつ隠れつするに、古希臘の勇士がその市その市の名譽を負ひて、一生の思出にオリンピヤの大競技會へ馳參ぜんと、駒を並べ、サンダル踏みしめて急げる樣も胸中に描かれ、身は二千年の昔に生れたらん心地して、覺えず肉躍り骨鳴るのであつた。

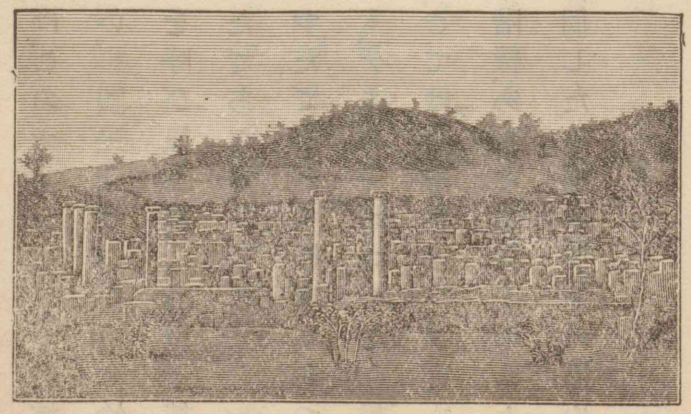
クロニオン丘青葉茂る處、その麓に二川の合流するあたり、オリンピヤの廢墟は永久に横たはつて居る。中央なるゼウス神殿大ギムナシウムの址、名工フィヂヤスがゼウス神像を鑄た處など、獨逸人の非常な精力によつて發掘された跡、一々指點すべく、その掘出した彫刻遺物は、はるか此方の博物館に手際よく陳列されて居る。

オリンピヤのゼウス神はパンヘレニックの神、希臘全土の信仰

サンダル
Sandal
クロニオン
Cronion　オリンピヤの遺址の東北にある小丘
ゼウス
Zeus　ギリシヤで諸神の主宰たる神
ギムナシウム
Gymnasium　古のギリシヤの競技場
フイヂヤス
Phidias　希臘の彫刻家（前4 0?-432）
パンヘレニック
Pan Hellenic　全希臘の

ツタツル
蔦蔓
マキ
延草
ニテン
纏まとふ
まつはる
足

を得た神である。四年に一度の祭日には、南は亞弗利加、西は伊太利、東は小亞細亞、苟も希臘人の住んで居る處なら、幾千萬の人々が此處に集ひ來つたのである。此の廢墟の奥に一部分のみ發掘された競技場の址は、彼等が一世の晴の場所であつた。今はその入口に蔦蔓が高く茂りあつて、羅馬時代に建てた凱旋門の半ば壞れて居るのに纏はるのが、如何にも名譽の月桂冠でゝもあるやうに見える。



オリンピヤ競技場廢墟

大競技は四年に一度の大祭日に催された。此の日は神聖なる

ヘロドツス Herodotus（前484-424頃）

デモステネス Demosthenes（前383-322頃）

テミストクレス Themistocles（前500-460頃）

平和の日として、希臘全土の人々が敵味方を忘れてこれに列したのである。希臘全土の一致結合は、このオリンピヤの競技によつて出來たといふも過言ではない。國民全體が面白く愉快にこゝに集り來り、各州の選手が雲を呼び風を起し、龍虎相搏つたのは、如何に壯快に且目覺しかつたであらう。

集つて來た人々の中には詩人もあつたであらう、學者もあつたであらう、ヘロドツスの如き歴史家も、デモステネスの如き雄辯家も、テミストクレスの如き勇將も、さては政治家・法律家、富めるも貧しきも、名門も平民も、あらゆる階級、あらゆる職業の人々が互に顏を合せ、談笑歡娛この間を徘徊したる樣の、如何に面白く且賑やかであつたであらう。

若し此處に名工があつたなら、彼の靈腕は此の群集によつて得

ペルシヤ戰爭
波斯希臘の戰爭
前五〇〇年から同四四九年まで數回の激戰があつて終に希臘の勝になつた

るところがなかつたであらうか。また文學家があつたなら、彼の橡大なる筆は此の群集によつて得るところがなかつたであらうか。想ふに此の競技は、單に競技そのものゝ進歩を來したのみではない。哲學・歴史・戲曲・音樂・彫刻などの發達に影響したことも蓋し鮮少ではなかつたのであらう。

この祭には市場が立つことになつて居た。物資の交換賣買が如何に全國の商業・農業を益したことであらうか。かくて思想・知識の交換・延いては感情の融和が國民の一致に貢獻する所があつたと同時に、商工業等にも影響したものが多かつたのである。

彼等はペルシヤ戰爭に於て國民的敵愾心の絶頂に達した。小忿を忘れて大敵に當り、よく東方の强を挫くことが出來たのは、このオリンピヤの競技に負ふ所が少なくないと思ふ。

モツトー Motto 標語

しかもその競技は職業的ではなかつた。選手は皆各州から送られた青年であつた。そして羅馬時代に入つて職業的となつた時は此の競技のはや衰へ始めた日であつた。言換へれば、此の競技は全國民をして眞の勇者たらしむるにあつたのである。そして全國民の體格と意思との發達は、此の競技に依つて益〻促進せられたのである。古代希臘に於ける教育のモットーは一言にして盡きる、曰く「健全なる肉體に健全なる精神宿る。」と。只此の健全なる精神を養成せんがために、健全なる肉體を作るに苦心したのである。希臘の彫刻には此の意味が現れて居る。希臘の文學にも此の意味が見えて居る。

オリンピヤの祭典は、かくて希臘の歴史始つて以來、永く國民的祭典として羅馬時代まで連續した。その事蹟は希臘の文化と

駈り
驅
除逐

スツディオン Studion 競技場

共に永久に亡びることがないであらう。近頃歐洲に此の競技が復興され、極東にさへ其の開設を見るに至つたのも、亦世界の文化を進め、國際の平和を維持せんとする古代希臘の精神の復興に外ならぬのである。

我が國に於ても單獨にもこのオリンピヤ競技の樣なものを催すがよからうと思ふ。我が固有の劍道・柔道より駈走・水泳・相撲さてはボート・ベースボール・フートボール等に至るまで、各階級を通じ、各地方に亙り、擧つてその選手を出して壯快なる競技をなさしめ、觀覽者も全國各地より雲集する一のスツディオンを設けるのは、盛世の一美擧ではなからうか。余のオリンピヤに遊ぶや、雷雨を衝いてゼウス神殿の廢墟に詣で、雜草萋々たる競技場を徘徊して、古希臘の文化の淵源の茲に存することに想到

した時、覺えず一種の希望を起した。それは「我が國民擧つて崇敬し奉る伊勢神宮に一大スツディオンを設け、一定の日を以て全國弓の競技を演ぜしめよ」といふ事であつた。（歐米文明記）

二六　佛法僧

高濱虛子

高濱虛子
名は清
俳人
小說家
明治七年伊豫松山生

雨月物語を見た人は高野山といへば一番に佛法僧鳥の事を思ひ浮べるであらう。此の鳥は日本國中二三の名山に外居らぬ鳥で、中にも高野の奧の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に

閑林獨坐草堂曉、　三寶之聲聞一鳥。
一鳥有聲人有心、　聲心雲水俱了々。

三寶
佛法僧

とあるやうに、其の啼聲がぶつぽふ、そうと聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として、特にもてはやされて居る。是に於てか秀吉の歌といふに、

傳へにし鳥も御法をおこなひの
聲は高野にありあけの月。

とかいふのがある。公卿僧侶の歌は固より澤山ある。中にも上田秋成は此の鳥に豐臣秀次の幽靈を配して雨月物語の一章としてゐる。其の物語は趣味ある文字として嘗て愛誦した事があつた。

夕飯の濟んだのち「今夜奧の院に往つて佛法僧の啼聲を聞いて來るから、提燈を貸してくれたまへ」と給仕の小僧さんにいふと、「かしこまりました」と小僧さんは笑ひながら膳を下げていつた

上田秋成
江戸時代の文學者
文化七年（一八一〇）歿
年七十八

が、いくら待つても來ない。一時間も經つてから、「本當に往くのですか。」と聞きに來る。「勿論、本當に往くさ。」と答へると、「途中で何か出ますよ。」といふ。「何が出る。猿でも出るか。」と聞くと、「新墓から幽靈が出て來ますよ。」といふ。晝間通つて見た時は大名などの古い墓ばかりが目についたが、成程中には新墓もあらう。「新墓の幽靈位何だ。」と元氣なことをいうてやる。小僧さんはまた薄氣味の惡い厭な笑ひやうをして降りていつたが、暫くして二つ巴の紋のついて居る大きな提燈を持つて來る。さうして「幽靈の外に野衾も出るさうですから氣をおつけなさい。若し二時間も經つてお歸りが無かつたら、お迎にいきます。」としやれた事をいふ。

小僧さん自身で提燈をつけてくれて、「表門は締めてしまつたから、裏口から御案内しませう。」と先に立つ。此の小僧さんは十六だといふに馬鹿に脊が低い。それが大きな提燈を提げてゐるので、少なくとも芝居の土蜘蛛に出て來さうな恰好だ。下駄を穿いて臺所の横にまはる。廣い臺所には一つ燈がともつて居るばかりだ。暗闇の中に、二三人の小僧さんが笑ひながら、我等を見送つて居る。それが提燈の光で纔かに見える。

がり〳〵と音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩疊な裏門のくゞり戸を、小僧さんが先に立つて開けてくれた時、鐵の鎖が戸にきしる音であつた。小僧さんが突出す提燈を受取りながら二人で表に出る。表は暗い。星はあるが、纔かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提燈を便りに其の白い土塀に沿うて表通りの奥の院道に出る。

土蜘蛛
源頼光が土蜘蛛の精を退治する

門前の數珠屋ももう戸を下して居る。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩すと形容されさうな大木が襖の如く連なつて居る。其の左右の襖でたて切つた中に、帶のやうに幅の狹い空が見える。其の空には星が光つてゐる。平生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では、我等の行手を照すに足らぬ。我等は提燈の光で纔かに足許を探つて歩く。

晝間は氣が附かなかつたが、縱横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに從つて隆起して、遂に杉の大木に集つて居る。友は提燈をさし上げて其の杉の幹に推しつけるやうにして歩く。友が三間ばかり歩いてもまだ杉の半面を照し盡さぬ。夜の杉は大きさのわからぬ巨人の如く突立つて居るのである。

寢鳥の立つ音がする。見ると提燈の上から圓筒の如く圓い光が空中に射出されて、それが高い〳〵杉の梢をうろついて居る。**寢鳥が泡を食ふのも尤もだ。**

歩きながら友に、雨月物語の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつて居る。何處やら心細くなる。斯ういふ時に野衾が道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥にうすぼんやりと明るいものが見える。何であらうかと氣にしながら往くと、突然木の間に空が見えて其處に鎌のやうな三日月が懸つて居る。向ふからふら〳〵と提燈が一つ來る。急に見えなくなるのは杉の木に隱れるのであらう。すぐ又現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ

泡沫影

釣狐
古狐が獵師の叔父白藏主に化けて甥がわなで狐を釣るのをやめさせようとして自ら釣られる

御廟
弘法大師の廟奥院谷にある

橋
御座の橋一の橋又大橋ともいふ

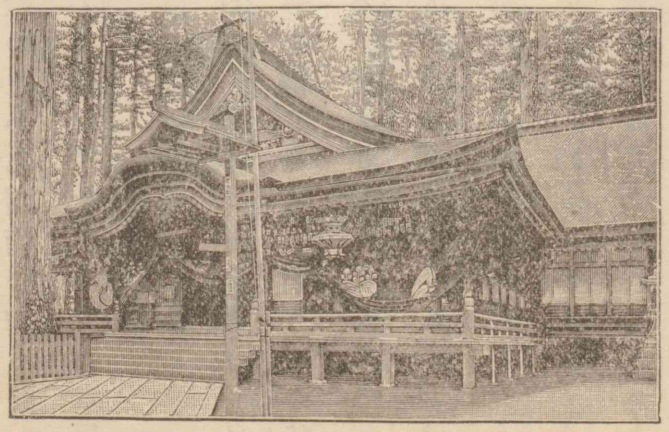
玉川
御廟のわきを流れる谷川所謂六玉川の一

燈籠堂
御廟の拜堂燈籠が澤山ある

その中に弘法大師入寂後祈親上人が獻じた一燈は今に滅しないでゐる俗に之を貧の一燈といふ

違ひ樣によく見ると、釣狐の狂言に出る白藏主に似て居る。行手に燈籠らしい燈が三つ燈つて居る。近よつて見ると御廟の橋だ。友が橋の上から提燈をつり下げて水面を照して居る。玉川の水は火を受けてちら〳〵と流れて居る。燈籠堂はすぐ其處に在る筈だが、眞暗でそれらしいものは見えぬ。

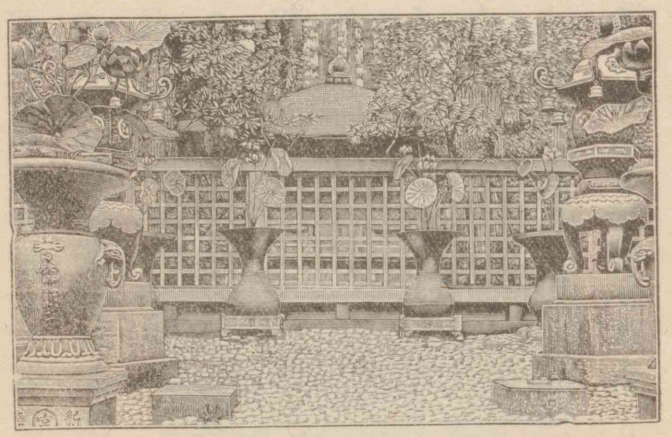
怪しみながら近よつて見ると、すつかり四周の蔀を下して寂然として寂しづまつてゐるやうだ。數百の燈籠のともに連なつて



高野山燈籠堂

ゐる夜の景色は淋しくも嚴かであらうと思つて樂みにしてゐたのに、これでは唯眞黑な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。

燈籠堂に沿うて御廟の前に出る。御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六個の小さい釣燈籠が燈つて居る。其の光で纔かに御廟の屋根と二三本の杉と線香立てとが見える。此の線香立てには晝間見たときは、煙が雲の如く渦卷いて居つた。其の煙の中に數珠をくすべたり鈴をくすべたりしてゐた信者が、今は一人も見當ら

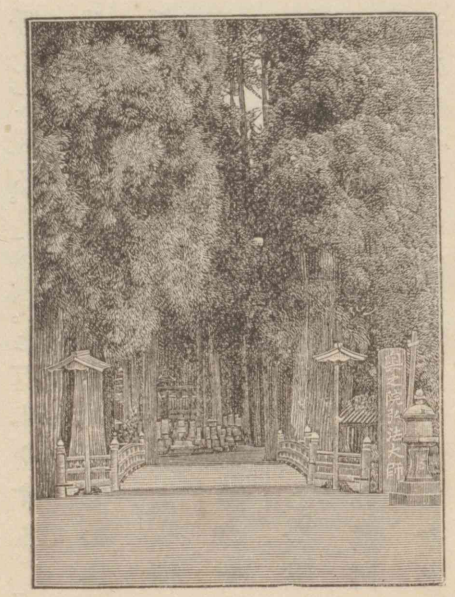


高野山弘法大師廟

ぬ。人間が居らぬばかりでなく今は一條の煙も昇つて居らぬ。提燈を中に突込んで覗いて見ると、冷たくなつた灰の中に、線香の燃滓の赤い紙が四五本殘骸をとゞめて居るに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立てだと思つたが、寂然として靜まりかへつたところを見ると、愈〻偉大な線香立てである。

燈籠堂の裏側の緣に腰をかける。我等より少し離れて緣に置かれた提燈の燈が、心細さうに瞬いて居る。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でゝも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺は無い筈だが、不思議だと思ふ。其の鉦の音に聞きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけたゝましい鳴聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帶びた聲だ。襟元から手を突込んで背中ぢうを搔きまはされたやうな氣持になる。

鉦の音はまだ聞えてゐる。鉦の音はよい音だが、この鳴聲は眞平だと思つて居ると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて提燈をさらつて行くやうなことはあるまいかと氣になる。氣のせゐか提燈の火は一層心細さうに瞬いて居る。



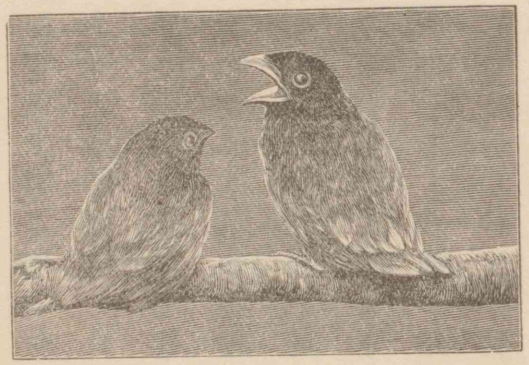
高野山奥の院

小さい咳拂が聞える。おやと思ふうち又一つ聞える。其の邊

鵯（ひよどり）

に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子にちよつとした明りがある。こゝは晝間線香などを賣つてゐた處であるから、直ちに番人の部屋と想像がつく。試に其の傍に行つて「もし〳〵」と呼んで見る。「へい」と返事をする。「ちよつと伺ひますがあのおそろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です」といふ。「へえ。何と云ふ獸です」と聞くと、「野ぶすまというて、蝙蝠のやうな鼬のやうな妙な恰好をした獸です」といふ。あれが野ぶすまかと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つて居るやうですが、あれは何處ですか」と聞く。番人は一寸だまつて居たが、「あれは鉦ぢやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です」といふ。

鉦の音かと思つてゐたのが鳥の鳴聲であつたのは意外であつた。殊にそれを聞かうがために來た佛法僧であつたのは愈〻意外であつた。「あれが佛法僧ですか」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。やはりかん〳〵と鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、かんと響く前にぶつといふ低い音が聞える。ぶつと低く響いてから、かんと高い冴えた聲が響く。詰りぶつかんぶつかんと鳴いてゐるやうに聞える。



佛法僧

多くの書物には文字通り佛法僧と鳴くとあるが、雨月物語には佛法といふ字に態々「ぶつぱん」と假名が振つてあつて、ぶつぱん〳〵と鳴くと書いてあつたやうに記

憶する。實際の鳴聲はぶつかん〳〵と聞えるが、先づ雨月物語のぶつぱんに近い樣だ。妙なもので、初は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。はじめ鉦の音と聞いた時も嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を聯想したが、これが生き物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に潤のある事に氣がつく。番人が、「大概夜中の二時か三時頃にならんと鳴かんのに、今晩は宵の口から頻に鳴いて居た」と云ふ。さういふ內も絕えずぶつかん〳〵と聞える。普通の鳥とは餘程違つて居る。法の御山の靈鳥として恥かしからぬ不思議の鳥だ。古來幾多の詩歌が之をもてはやしたのも尤だ。私は嘗て、高野の山の靈山であることは奧の院道の杉の大木で證據立てられるといつたが、否々杉はものかは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。見ると遙か彼方の緣に置かれた提燈の燈も、今は靜かにともつて居る。

御影供
弘法大師畫像を祭る日
舊曆三月二十一日

番人は淋しい燈籠堂の夜陰に偶〻話相手を得たので問ひもせぬのにいろ〳〵話をする。どの話も耳新しく面白かつたが、なかにも此の燈籠堂で焚く油はおびたゞしい事で、月に一石から二石の間を往來して居る。殊に三月二十一日の御影供の時は一日に一石の油を焚くといふ事と、貧の一燈の燈は信者の所望によつて線香に移してやる、それを遙かに北海道や九州あたりまで持つて歸る、中には途中で、消えたといふので、大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは面白かつた。

ふと氣がつくと佛法僧はいつの間にやら鳴かぬやうになつて

ゐた。唯野ぶすまが時々荒膽をひしぐやうな鳴聲をする。歸途につく。

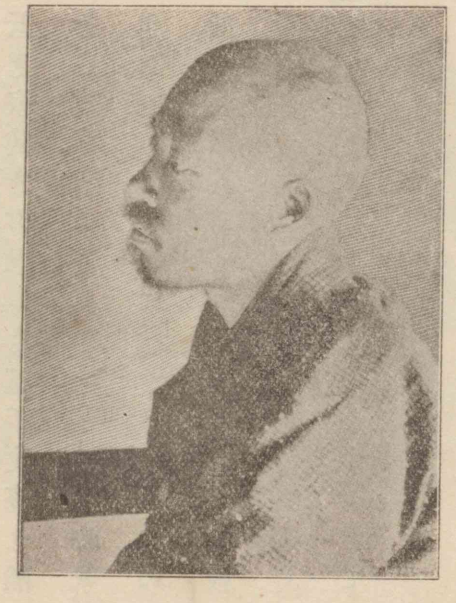
御廟の橋にかゝつた時、友が「また鳴く。」といふ。向ふの墓原を縫ふやうに提燈が一つ來る。女が三人、男が一人「南無大師遍照金剛」と唱へつゝ水向地藏の前を通る。（十五代將軍）

正岡子規
名は常規
俳人
歌人
伊豫松山生
明治三十五年歿
年三十五

二七　故郷

正岡子規

世に故郷ほどこひしきものはあらじ。花にも月にも喜にも悲にもまづ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學問を究め、見聞を廣くする地にはあらず。されど故郷には歸りたし。故郷は事業を起し、富貴を得る地にはあらず。されど故郷には住みたし。兩親姉妹あるが爲に故郷に歸りたしと思ふもあらん。我は親同胞ともに故郷にあらねど、なほ故郷こそこひしけれ。都にありて世を厭ふが爲に故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまでに世を厭ふしもなくて、猶故郷こそこひしけれ。想へば十餘年の昔、はやり氣の抑へ難くて、單身故郷を出でゆかんとこそは勇みしか。いざ首途といふ際に一點の熱涙は覺えず頰のあたりに流れ來るを、見送の人に見せじと顏背けたる時の苦しさ、何やらん胸に痞へたる心地な



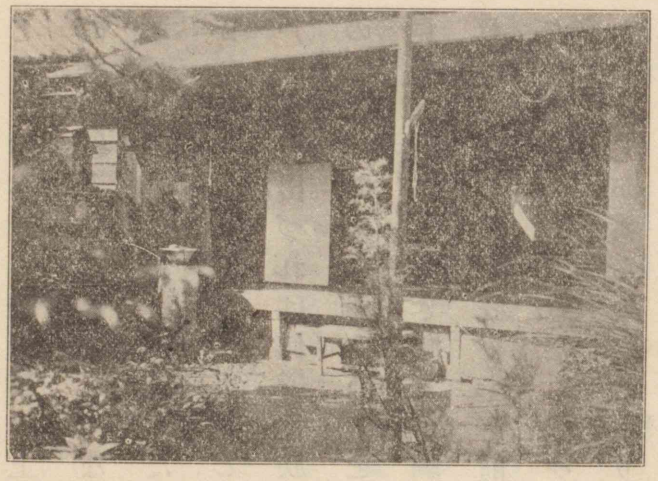
正岡子規

りき。母親の乳所と故郷の土とは離れうきものなり。

故郷近くなれば、城の天主閣こそ先づ目をよろこばす種なれ。低き家、狹き町、淋しき繩手、丈高き稻の穗、鼻の先に並びたる連山、をさなき頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるが如く、何れなつかしからぬはなし。まづ身よりの家を此處彼處と音づれて久濶の情を敍ぶれば、年老いたる婆々樣、瘦せたる叔父御、肥えたる叔母御、よく居眠する下女の顏さへ見覺えたるまゝに少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも歸り着きし瞬間なり。

變らぬはめでたけれど、全く變らでは何の面白き事かあらん。變らずと見るうちに、いさゝかながらかれもこれも變り行きたるこそなか〳〵に聞きて、見て、ゆかしけれ。人の上につきて第

一に變りたるは、わが從弟妹のいたくも成長したることなり。



「都の人こそ來たまへれ。われも其の顏見ん」などひしめきあひ、わが前に跪きて禮を述ぶるもあれば、襖の隙よりはづかしげに窺ふもあり。をさなきは、はじめて見たる顏もあり。さらぬも、おもかげばかりはもとのまゝにて、振分髪の、兒髷に變りたるも少なからず。曾て見し時には、小學讀本を高らかに讀上げて誇らしげに人に聞かせたる男の子の、今はもはや海陸

軍を談じ、外國の形勢を說く程になりたるもあり。唐黍の殼などもて拵へたる雛を箱の上に並べて、まゝ事に餘念なかりし女の子の嫁入すべきほどになりて、わが膝もとに茶を汲みて置きながら、顏もえあげで退きたるなど思へば、彼方よりは我をもしか年とりたりと見るらんと、獨り心に恥づること多かり。

戸の外に出づれば、何縣士族寄留といかめしく標札せる家どもの、大方は聞知らぬ人の名を示して、中にも陸軍出仕の人々多く見受けらる。幼き時より馴染になりし本屋は昔のさまながら、見なれぬ丁稚は我を十年前の華客とも知らで、よそ〳〵しくもてなしたるも本意なく覺ゆ。豫て知りたる道具屋は引越しゝか、潰れしかあらぬ店となりて、淋しかりし武家町の角に料理屋の軒を並べたるもあいなしや。いで菩提所に詣でて、久しぶりに樒にても手向けんと辿りゆけば、山門なかば崩れて一條の汽車道は其の傍を横ぎれり。あなやと驚きてすこし左に曲れば、數百の墓累々として、未だあれはてぬとにはあらねど、彼の鐵道に隔てられ、父君などの墓のうしろには一歩ならぬに粟・黍など秀でたり。一目見るより覺えず目をしばたゝきぬ。

粟の穗のこゝを叩くな、この墓を。

嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。（子規隨筆）

うゝ　樒しきみ。有毒植物。黄色の花を開く。仏前に供ず。香を製す。

昭和拾壱年弥月拾弐日第一回学習終了

師範國文 第一部用 卷一 終

文部省檢定濟
大正十五年三月十七日　師範學校國語科教科書

大正十四年十月二十七日印刷
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十日訂正再版印刷
大正十五年三月十三日訂正再版發行

定價	大正十五年度臨時定價
卷一・二　金四十三錢	金七十三錢
卷三・四・五・六　金四十三錢	金六十八錢
卷七・八・九　金三十九錢	金六十六錢
卷十　金四十三錢	金七十三錢

著作權所有

編者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平

發行兼印刷者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎

發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店
（電話麹町大手七三四〇番）
（振替口座東京三二七番）

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

東京秀英舍印刷

增鏡鈔本	全訂	全修	全修
平家物語鈔本	全訂	全訂	全訂
大平記鈔本	全訂	全修	全修
國語教科書	東京高等師範學校教授 吉田彌平編	東京帝國大學文學士 保科孝一編	東京帝國大學文學士 吉田彌平編
國文讀本	學習院教授	學習院教授	學習院教授
國文讀本	東京帝國大學文學士	東京帝國大學文學士	東京帝國大學文學士
國文讀本	女子學習院教授	學習院教授	學習院教授
近古文新鈔	東京帝國大學文學士 高野辰之編		
近世文新鈔	全訂	全訂	全訂
現代文新鈔	全訂	全修	全修
中學國文教科書	全修	全修	全修
師範國文	東京高等師範學校教授 吉田彌平編		
	全訂 正一再版	全訂 正二再版	第一部用全十冊 第二部用全二冊
	全訂 正一再版	全訂 正二再版	全訂 正十七版
	全訂 正八再版	全訂 正一再版	全訂 正五版
	全訂 正十再版	全訂 正十再版	全訂 正五版
	全訂 正十再版	全訂 正一再版	全訂 正拾版

方丈記讀本	全訂	全訂	全訂
神皇正統記鈔本	全訂 正一再版	全訂 正一再版	全訂 正一再版
徒然草讀本	佐藤正範編 東京立教中學校教諭 諸星寅一編	全訂 正一再版	全訂 正一再版
益軒文鈔	全訂 正一再版	全訂 正一再版	全訂 正一再版
花月草紙鈔	全訂 正一再版	全訂 正一再版	全訂 正一再版
十六夜日記講本	全訂 正一再版	全訂 正一再版	全訂 正二再版
義經記鈔	全訂 正一再版	全訂 正一再版	全訂 正三再版
常山紀談鈔本	全訂 正一再版	全訂 正一再版	全訂 正一再版
徒然草鈔本	全訂 正一再版	全訂 正一再版	全訂 正一再版
珊代文鑒	光風館編輯所編		
保元平治物語鈔本	全訂 正一再版	全訂 正一再版	全訂 正一再版

広島大学図書
2000044861